
西園寺さんちの家庭事情

伊宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

西園寺さんちの家庭事情

【Nコード】

N1349M

【作者名】

伊宮

【あらすじ】

主人公、東谷^{あずまや} 椿^{しばき}は十六歳。女手ひとつで育ててくれた母親がある朝突然、世界一周の旅に出た。おしとやかなふたりの姉と共に椿が居候することになったのは、従兄妹であり超大金持ちな西園寺家。東谷家の三姉妹と、西園寺家の三兄弟が織り成す恋愛小説。糖度は低めです。

東谷 椿、十六歳の春

馬鹿馬鹿しい話だけれど、お伽話はどうして三女が大人しいのか。

シンデレラしかり、美女と野獣しかり、青髭しかり。

三人姉妹の末娘たちは、揃いも揃って分不相応なお姫様願望を持っている。

アタシにはそれが不思議でならない。

何故なら我が家は三女がまったく女の子らしさのおの字も持っていないからだ。

皮肉なことに、その三女とは他ならぬアタシのことなのだが。

そう、うちの三人姉妹は何かがおかしい。

長女、牡丹は夏生まれ。おしとやかで優しい読書家、平和主義。

次女、桜は春生まれ。多趣味多芸の大和撫子、家族思い。

そしてアタシ、三女椿は冬生まれ。家事も勉強も大嫌い。家事は嫌だが火事は歓迎、学校なんか燃えちまえ。

一体全体、どこをどうまかり間違って、アタシがふたりの妹として

生まれてきたのか分からない。

ことの発端は何かというと、これしかあるまい。父と母のお見合い結婚だ。

全ての不幸はそこから派生したのだ。

結婚二年目、牡丹が生まれ、六年目で桜誕生、更に五年後、なんと結婚十一年目、アタシ椿が無事生誕。

父は長きに渡り頑張りすぎたか、そのまま帰らぬ人となりました。

そこから先は、聞くも涙、語るも涙の貧乏生活。

女の細腕一本で、母は三姉妹を育て上げるべく日々奔走。

昼はスーパー、夜はスナック。

いやはや、女は弱くとも母は強し。叔母の援助を断って、母は女手ひとつを貫いた。

そしてアタシたち三姉妹も、これからは母を手伝い女四人で儉しく生きていくものだと思っていた。

そんなある日のことでございます。

猫の額ほどの狭い台所に手紙が一通。牡丹、桜、椿の三姉妹は、それを見て悲鳴を上げる。

「私の愛する三人娘へ。
母、疲れた。」

というわけで、西園寺の叔母さまと一緒に世界一周お昼寝バカンスに行くことにしました。意地張ってるのも馬鹿らしいから、こうなったらとことん叔母さまに甘えるつもり。

あなたたちの面倒は、西園寺家がみてくれるそうです。かわいい私のお花ちゃんたち、意地を張ると、女は幸せになれないからね！
母より」

「まあ、困るわ、母さんたら。椿の学校もあるっていうのに」
と、長女牡丹。

「でも、まあ、西園寺の叔母さまとなら安心よ。所在も分かるし、よかったわ」
と、次女桜。

ちょっと待て！ と、アタシ、三女椿は喝を入れる。

そういう次元の話じゃない？

しかし、おっとり姉さまたちは、これっぽっちも気がついちゃいなかった。

「大丈夫よ、椿。西園寺さんちのところのご長男、とっても優しい方だもの」

「心配いらないわ、椿。あそこの三兄弟とは、昔よく遊んだじゃないの。知らない仲じゃあないんだし」

ええ、そりゃあもう、ようくご存知ですわよと、アタシ、三女椿は心の中で苦虫を噛んだ。

西園寺家の三兄弟と、アタシたち、東谷家の三姉妹はいとこ同士。

西園寺家の長男、傑は自信過剰の嫌味野郎で、アタシ、三女・椿をぺんぺん草とせせら笑った過去を持つ。

西園寺家の次男、護は無神経なスポーツ馬鹿で、アタシ、三女・椿を鈍臭いと見下した。

そのくせアタシよりも数倍とろい西園寺家三男、学を溺愛していて、

学が泣き声を上げようものなら地球の裏側からだって飛んでくる。

そんなパブロフの犬ならぬ、三男・学の狂犬のもと、これから同居？ ふざけるな！

そう思ってはみたものの、アタシ、二女・椿は十六歳。拒否権などあろうはずもない。

かくして、西園寺家三兄弟と、東谷家三姉妹の、奇妙な同居生活の幕開けとなったのでございます。

それは初恋という名の悔恨

久しぶりに足を踏み入れた西園寺家に、アタシ、三女・椿は啞然と
していた。

門から先に、家が見えない。

東谷家まで迎えに来たロールスロイスの中で、これはもうギャグな
んだな、と失笑を漏らす。

だってそうだろう。今までは、貧乏なアパートに四人がぎゅうぎゅ
う詰めで暮らしていたのだ。それなのに、新しいお家は門から先に
公園が広がっているなんて。

しかし、長女・牡丹は微笑んでいた。

「久しぶりに来たけれど、大きなお宅ねえ。なんだか気後れしちや
うわね、桜、椿」

気後れどころの話じゃないだろうと思うアタシであるが、次女・桜
はそれに続いた。

「ほんとに。あら、見て。薔薇のアーチよ。なんて素敵」

薔薇のアーチィ？！

車窓から無意味に拾い庭を眺めると、そこには次女・桜の言つとおり薔薇のアーチが。

よくよく見ると、ドーベルマンが数頭佇み、湖と見紛うばかりのかい池。

そのほとりに立つマリア像の足元で、天使が数人まどろんでいる。

一体全体、どんな悪事を働けば、こんな豪邸に住めるのか。

嫌疑の眼差しで庭を眺めるアタシ、三女・椿である。

植物好きの次女・桜はその傍らで、延々と続く薔薇畑に溜め息をついていた。

「本当に、何て素敵なお庭かしら。薔薇の園だなんて、まるで不思議の国のアリスみたい」……………、だとしたら、へんくつ女王はこの長男だ。

誰の趣味だこの庭は、と、アタシ、三女・椿が呆れる横で、長女・牡丹と次女・桜は、ただ感嘆の息を漏らしていた。

「大変お待たせいたしました」

ロールスロイスがゆっくりと止まり、運転手のおじさんがそう言った。

見上げた建物に、東谷家三姉妹は息を呑む。

城か、ここは。

そうしていると、運転手のおじさんが降りる前に、車のドアが開けられた。

どうぞ、と言って手を差し伸べたのは、西園寺家長男、西園寺傑さいおんじ すぐるその人だった。

長女・牡丹がその手を握る。そうしているのは姉なのに、アタシはひとりでどぎまぎしていた。

「ようこそ、東谷家のお嬢さん。西園寺家を代表して、歓迎します」

ロールスロイスを降りたアタシたちに、長男・傑はそう微笑んだ。

長女・牡丹がゆったりした動作で頭を下げる。

「傑さん、突然ごめんなさい。姉妹三人、ご厄介になります」

そのリアクションの何が面白いのか、長男・傑は声を立てて笑う。

「相変わらず堅苦しいな、牡丹」

自分だって堅苦しさ百パーセントの挨拶をしてきたくせに、長男・傑はそう言った。

しかしそれで緊張が解けたのか、長女・牡丹も恥ずかしそうに少し笑う。「だって、お家はこんなに大きくて、お庭はこんなに広くて。それに、それに傑さんが……」

「俺が？」

「……、こんなに素敵になってるんだもの」

長男・傑はぱかんとして、それから優しい顔で微笑んだ。

「俺も驚いた」

そうでしょう、と、牡丹は言う。

「突然こんなことになって、傑さんが驚くのも無理ないわ」

そうじゃないんだけどな、と長男・傑が呟いたところで、巨大な板チョコみたいな扉が開き、短髪の男が顔を出した。

「おい、兄貴。いつまで外で喋ってんだよ」

「護」

出てきたのは、そう、西園寺家次男、西園寺護さいおんじ まもるである。

すっげえ筋肉、とアタシがぼんやり眺めていると、次男・護はアタシを普通にスルーして、まっすぐ次女・桜に目をやった。

「桜！」

「護くん？」

見ると、次女・桜は目をまん丸くして、次男・護を見つめていた。

「護くん……、ほんとに護くん？」

そう繰り返す次女・桜に、次男・護は口角を上げる。

「当たり前だろ。偽者が出てきてどうするんだよ」

「だって、護くん、なんだかすごく、男らしくなってるんだもの」

そんな感想を漏らした桜に、護は意地悪そうににやりと笑った。

「何だよ、それ」

そして今度は頬を染める。

「そっついお前だって……………」

「え？」

「……………何でもねえ」

そっぱを向く次男・護。それを見て、長男・傑が弟の胸をとんと叩いた。

「なに照れてんだ、お前」

「別に、そんなんじゃないよ」

手を振り払った弟に笑って、長男・傑は「おっと」と声を上げた。

「悪かったな、立ち話させて。大したことない家だけど、上がってくれ」

それでアタシたち三人が、すっかり恐縮したのは言うまでもない。

「最上階だと眺めがいいけど、不便だからな。三階の客間を空けたから、好きに使ってくれていい」

長男・傑のそんな台詞に、長女・牡丹は頭を下げて、次女・桜はお礼を言った。そしてアタシ、三女・椿は啞然とする。一体全体何階建てなんだ、この家は。

あてがわれたそれぞれの部屋に荷物を置いて、東谷家三姉妹は長女・牡丹の部屋に集まった。

「本当に、夢みたい……………」

冗談みたいなふつかふかのベッドに顔をうずめて、長女・牡丹が呟いた。

それを聞いて、次女・桜がクスクス笑う。

「夢みたいなのは、傑お兄ちゃんがあんなに素敵になってたことでしょ？」

ハッと上げた長女・牡丹の顔には、はつきり凶星と書いてあった。

「そ、それは……………。桜だって、護さんに見惚れてたじゃないの」

言い返されて、次女・桜はぽつと顔を赤らめて俯いた。だって、と、

言い訳を始める。「だって、護くんがあんなに男らしくなってるんで、全然思ってたなかったもの……」

それからふたりは揃って頬を染めるなり、アタシに向かって口々にまくし立てた。

「ねえ、椿だって、傑さんがあんなに素敵で、驚いたわよね？」

「ねえ椿、護くん、かつこいいなあって、椿だって思ったでしょ？」

「ア、アタシは……」

「椿、どうしよう。傑さん、あんなに素敵になっちゃって」

「椿、さっきの私、変じゃなかった？ 護くん、私のこと変に思ったかしら」

どもる三女に長女と次女は詰め寄った。

ふたりの質問攻めから逃げるべく、アタシ三女・椿は立ち上がる。

「ア、アタシ、お風呂の場所とか、聞いてくる！」

「え？ ちょっと、椿、待ちなさい」

ふたり揃った制止の声を振り切って、アタシは長女の部屋を飛び出した。

やたら幅のある螺旋階段を駆け下りる。たどり着いた大広間で途方

にくれていると、たくさんあるドアのひとつが少し開いていて、そこから声が漏れてきた。

「チエック」

「何だってそんなにぽんぽん取れんだよ！」

傑と護だ。

そうつと覗くと、ふたりはチェスボードを挟んでいた。

「言つたろ？ お前はビショップを遊ばせすぎてる。それに、クイーンを動かすのが遅すぎ」

「女を矢面に立たせる趣味ねえよ」

お前なあ、と呆れた声を出した長男・傑をちらりと見て、次男・護は溜め息をついた。

「なあ、兄貴」

「ん？」

「あいつら、今日からここに住むんだよな？」

「……ふーん」

ニヤニヤと笑う長男・傑に、次男・護は頬を赤く染めながら「何だよ」と文句を言った。

「桜、可愛くなってたな。同じ屋根の下なんて、考えただけで理性が吹っ飛んでいきそうか？」「ば、馬鹿言ってんじゃねえよ。兄貴だって、牡丹ちゃん見て、内心どきまぎしてやがったくせに！」

「うるさい。何だってお前は余計なところで勘を働かせるんだ」

そう言いながら、長男・傑も頬が赤い。アタシ、三女・椿は、なんだかすっかり呆れてしまった。

なんだ、お前ら。早速カップル成立か。

「俺は勘がいいんだよ」

と、言った次男・護に溜め息をついて、ふと視線をこちらに向けた傑が、覗き見るアタシに気がついた。

「おう、ぺんぺん草。どうした、迷子か？」

牡丹姉ちゃんに対するのと、何て違い。

アタシはむっとして言い返した。

「ぺんぺん草じゃないもん。椿だもん。えーっと、そのう、お風呂の場所とかを訊きにきました」

姉にもした言い訳を、ここでも披露するアタシである。ああ、ワンパターンだところり嘆くアタシに気づかず、ふたりはぽかんとアタシを見ていた。

「風呂つて………、部屋に備え付けてあつただろ？」

「へっ？」

今度はこっちがぽかんとする番だ。風呂は全室備え付け？！

「ギャグだ……」

呟いたアタシに次男・護は不思議そうな顔をして、長男・傑は少し笑った。

「椿、本当はどうしたんだ？」

「え？」

「お前がそんな事に気がつかないとは思えない。訊きに來るなら、牡丹か桜だろ？」

うぐつ、鋭い。っていうか、アタシも気がついちゃいなかったんだけど、それはまあ訂正する必要はないだろう。昔から頭脳明晰な長男・傑にごまかしはきかない。仕方がない、と、アタシ、三女・椿は観念した。

「……お姉ちゃんたちが、傑兄ちゃんと護兄ちゃんのこと、うるさく言っから逃げてきた」

「え？」

驚きの声はふたり同時だ。そしてこれまたふたり揃って、
「何て言ってた？」

長男・傑はアタシのことをまっすぐ見つめ、次男・護はほんの少しそっぱを向くようにして、ふたりの顔は赤かった。

瓜二つなその風情。それを見て、アタシ、三女・椿は、初恋の相手がこのふたりだったことを思い出していた。

傑兄ちゃんは昔から頭が良くて、いろんなことを知っていた。それは秘密の暗号みたいで、聞くとびアタシは、いつも特別な気分になっていた。

この暗号の謎が解けたら、世界は変わると信じていた。

護兄ちゃんはちっちゃい頃からスポーツ万能で、運動に分類されるものなら何でもこなした。西園寺家にあつた大きな大きな木の上に、逞しい腕でアタシを引っ張り上げてくれた。

つまり、子供ってそうなんだよね、と、アタシは今、冷めた気持ちで考える。

自分よりちょっと物知りなら、世界一の天才少年かと錯覚してさ。小学生の頃の男の価値って、いかに足が速いかじゃない？

そういうわけで、小さい頃のアタシってば、ふたりの間をウロチョロ、ウロチョロ。

初恋がいきなり二股なんて、と、アタシはなんだかふて腐れた気分になって成長したふたりをじっと眺めた。

「教えてあげない」

アタシが言つと、傑と護は、「生意気」と豪快に笑う。

「もうちょつと女の子らしくなってるかと思つたら、椿だけは変わつてないな」

と、長男・傑。

「可愛げのねえおんなに育ちやがつて」
と、次男・護。

ふーんだ、ほつといてよ、なんて拗ねてみせながら、アタシの中に渦巻いているのは、確かな後悔。

アタシって、男を見る目がなかつたんだわ。

確かに顔は整ってるさ。確かにいい身体してると思うよ。
おまけに嫌味なくらいの金持ちで、百人が百人、羨むだろう色男で
すよ。

だけどねえ、と、アタシは溜め息と共に母を恨む。

アタシに対するこの態度。姉たちに対するのと、なんて違い。

アタシの頭を小突くふたりを見上げながら、アタシはひどく、うろたえていた。

だって、腹立たしいと感じているのに、心のどこかではこの扱いに、
なんだか安心していたんだから。

出陣の朝

西園寺家、三男・学が帰ってきたのは、その日の夕食時だった。

やけに広い食堂で（食堂って時点でもう笑う）、前菜が運ばれてくる直前のことである（シェフが作るとかナメてんのか）。

両開きのでっかい扉が開いて、「ただいまあ」と呑気な声でご登場、
さいおんじ まなぶ
西園寺学。

食卓にしているアタシたちを見て、学は、

「あれ、今日からだっけ？」

と、笑顔になった。

「学、おかえり」

長男と次男の声が重なる。

「休みの日まで部活なんて大変だったな」とか、

「遅くなるんなら迎えに行っちゃったのに」

とか、早くもブラザーコンプレックス全開だ。

それに笑いながら対応する学に、長女・牡丹がかしこまって言った。

「学さん、おかえりなさい。これからよろしくね」

次女・桜もそれに続く。

アタシ、三女・椿としてはどうしたらいいのか分からなくて、ただぼんやりと学を見ていた。すると学は顔をほころばせて、アタシのところまで駆けて来る。

「椿ちゃん！」

その可愛らしい笑顔と投げかけられたアタシの呼び名に、ひどく癒されてしまった。

ああ、この性悪どもの巣窟で、なんて愛らしい三男・学！

「学、久しぶりー」

アタシも笑顔になって、座ったまま学とハイタッチをした。パアンと小気味いい音が響いて、この家も悪くない、と一息ついたその瞬間。

「椿ちゃん、ぼくと同じ学校なんだよね？」

その学の問いかけに、アタシは瞬時にフリーズした。

放心状態で食卓に着いた面々を見ると、彼らは笑いながらアタシを見ている。

「編入手続きはとっておいた。制服は来週には届くから、それまで我慢しろ」

と、西園寺家長男・傑。

「頭の程度が追いつかないなんて泣き言、言うんじゃないぞ？」
と、西園寺家次男・護。

「良かったわねえ、椿。学さんと同じところなら安心ね」
と、東谷家長女・牡丹。

「良家の人たちばかりが集まる名門校ですって。羨ましいわ、椿」
と、東谷家次女・桜。

無神経な従兄妹の兄たちと、のんびりすぎるふたりの姉に、アタシは思わず絶叫していた。

「だって、高校せつかく受かったんだよ?! アタシの努力はどうなの?!」

西園寺家の長男、次男は、またもやアタシを奈落のどん底に突き落とす。

「水の泡」

その一言を、あの受験戦争を勝ち抜いた兵士に投げかけるなんて。

翌朝、アタシはくさくさした気分のまま登校した。

・・・・・・運転手つきの、ロールスロイスで。

「ヤクザの娘じゃあるまいし、黒塗りのロールスロイスなんて冗談じゃない」

なんて文句を言ってみたけれど、本当に言いたいのとはそんなことじゃなかった。

本当に、アレは戦争だったのだ、と、アタシは受験時代を思い出す。普通の公立中学で、女友達と恋バナしたり、男友達と馬鹿な悪戯したりしながら、アタシたちは必死になって勉強していた。

くる日もくる日も、放課後遊びたいのを我慢して、面接練習なんかやっていた。

うちはもう、笑い飛ばすしかないくらいの極貧っぷりだったから、電気代をケチって図書館に通い詰めてまで勉強した。

迎えた試験はベストの状態とはいえなかったけれど、そしてやってきた可否発表。

受験票を握り締めて、自分の番号を発見した時の、あの高揚、あの達成感。

それが全部、海の藻屑と消えるだなんて！　こんな理不尽が許される？

そう思っただけで上げた名門私立の校舎は、教会かと思ふばかりにきらびやかだった。

「だってここ、理事長がカトリックなんだ。朝礼で聖書読むんだよ」

学はそう言ってアタシに古びた聖書を手渡した。

「それ、傑兄ちゃんのお古だけど、椿ちゃんのが届くまで使って。教科書は間に合ったんだけど、傑兄ちゃん聖書がいるってことすっかり忘れてて、それだけまだ届いてないんだよ」

「つまりここは、傑兄ちゃんの母校なわけね？」

アタシが訊くと、学はにっこり笑って頷いた。

ああ、もうこれで、逃げ場はないのだ。

アタシは聖書を見つめて観念した。長男・傑の母校なら、奴の息がかかっていると考える間違いはないだろう。

こうなりやもう、乗りかかった船。毒を食らわば皿まで。

東谷椿、十六歳。良家の坊ちゃん、嬢ちゃんたちと、大親友になってやる！

さあ出陣、いざ鎌倉。

温室育ちのボンボンども、首を洗って待っていやがれ！

美術部顧問はゴーギャンが好き？

職員室まで案内してくれた学が、「じゃあ後でね」とアタシのもとを去ってから、約一時間が経過した。

アタシ、東谷椿十六歳は、担任教師に連れられていった教室で、まともや質問責めにあっていた。

「東谷様、西園寺様と同居なさっているって、本当ですよ。」

「従兄妹でいらっしゃるのでしょうか？　なんて羨ましいこと！」

「あの方、本当に素敵でいらっしゃいますもの。東谷様も、そうお思いになりませんか？」

こんな調子である。

アタシはすっかりうろたえてしまって、「はあ、まあ、そうですね」などと言って、お嬢様たちの失笑を買っていた。

それにしても、学はそんなに人気なのか。ちっちゃい頃はアタシのうしろを付いて周って、ちょっと転んだくらいでピーピー泣いていたというのに。

お嬢様たちに囲まれた環境が思っていたより窮屈で、アタシはさっさと授業が始まらないかなあ、なんて考えていた。

始業のベルらしきものが鳴ったのに、教師がやって来る気配がまるでないのだ。一体全体どういう学校だ、と、アタシはすっかり辟易した。たまらず隣の女の子に、勇気を振り絞って声をかける。

「ねえ、先生、遅くない？」

するとその子は、一瞬驚いた顔をして、それからゆったりと笑顔になった。

「お気になさることございませんわ。あの先生、いつもおそろそじのお出ましですもの」

「はっ？」

「頓着がおりにならない方ですから」

なに、なに、なに?! どういう意味?!

混乱したアタシはちよつと苦笑いして、「あ、そうなんだ」しか言えなかった。

それから丸一日、そんなだった。

お嬢様言葉は難解だ。例えばの話。

(多分)恋バナをしていた女の子が泣き出した。それをクラスメイトがこぞつて慰めている。

「わたくし、おさびさびの毎日ですの」

………なんだって？

ああ、東谷椿十六歳、早くも後悔。

こんなところに来ちまうなんて！

放課後、教室まで迎えに来てくれた学に、アタシは早速泣きついた。

「学、ここは日本じゃないよ。アタシの知ってる日本語なんか、ひとつも出てきやしなかったよお」

「なにそれ。どうしたの、椿ちゃん」

それでアタシは、今日一日のことをすっかり話した。涙ぐむアタシに、学は突然笑い出す。

「アタシが真剣になってるっていうのに、笑うわけ？！」

「ごめん、ごめん」

適当に謝りながら、それでも学は笑顔を崩したりはしなかった。それがますます、腹立たしい。

「おそろそじっていうのはね、遅いって意味だよ。だから、『心配しなくっても、あの先生いつつも遅いんだ。時間にルーズな奴だから』ってこと」

「……おさびさびは？」

「寂しいってことだよ」

そんな日本語、知るかつ！

そう悪態をつくアタシに、学は笑って話題を変えた。

「ところでさ、椿ちゃん、部活どうすんの？」

「そんなもん入る元気ないよ。どうせお嬢様に囲まれるんでしょ」

アタシが言つと、学はちよつと困ったように微笑んだ。そして、言う。

「ぼくと同じとこ入りなよ。美術部だけど」

「美術部！！」

アタシは思わず悲鳴を上げる。

そんな、お嬢様のアジトみたいな部活なんか入れるか！！

「でも、この学校、全校生徒入部義務あるんだよ」

無邪気な学のその一言で、アタシは人生初のブラックアウトを体験した。

そしてやってきた、美術部部室。なんと校舎とは別棟でアトリエつき。

どういう了見だ。

今日一日ですっかり打ちひしがれていたアタシは、美術部部室の前で最後の力を振り絞って抵抗していた。

「やだやだやだ！！ アタシもう帰るっ！！」

「大丈夫だよ、椿ちゃん。怖くないから」

学は困り果てた様子でアタシの腕をぐいぐい引いた。

怖くないだと？ 嘘をつけ！

アタシは学ごしに美術部部室の扉を睨む。

「何でよりにもよって、扉が地獄の門なわけ?!」

「へえ、すごいや、椿ちゃん。これが地獄の門って分かるなんて」

分かるに決まってんでしょ、と、アタシは涙声で訴えた。

そう、美術部部室の入り口は、まさに地獄へのそれだったのだ。

ロダン作の「地獄の門」。毒々しいフォルム、天に向かって腕を伸ばす、地獄に堕ちた亡霊たち。ああ、上におわすは考える人。角度的には、絶対こつちを睨んでる。

「何でこんなもんがこんなとこにあんのよ?!」

「先生の趣味」

アタシの尤もすぎる質問に、につこり笑って学は答えた。

ね、ユニークな部活でしょ？ なんて、まったく冗談じゃないっての。

学は何故かしゅんとして、「おかしいや」と呟いた。

「椿ちゃんは昔、ぼくの女親分だったのに」

そんなこと言われたって、と、困惑するアタシである。落ち込んだ様子の学は何と声をかけていいのかわからない。アタシの気持ちを知ってか知らずか、学は気を取り直したようで笑顔になった。「勿論本物じゃあないよ。先生が持ってきたんだって」

笑いながら学は地獄門を押し開ける。さぞかしすごい音がするかと思いきや、案外スムーズにそれは開いた。

持ってきたって、一体どこから？

アタシたちを呑み込んだ地獄門がボタンと閉まる。もうそれ以上追及するのはやめようと、アタシも気を取り直して前を向いた。そして、固まる。

廊下いっぱい、いたるところに時計の山。

通路を避けるようにして、窓枠から棚の上から、見れば見るほど、時計、時計、時計。

「………学」

こっちだよ、などと言いながら、学は笑顔で進んで行く。アタシはそこから動けずに、もう一度声を荒げて学を呼んだ。

「学、これは何？ 何でこんなに時計だらけなの？ しかもカチコチうるさいんだけど！」

そう、ごまんとある時計は、全てアナログだったのだ。

時計が、分針が、秒針が、あつちでカチカチ、こつちでコチコチ。

学はやっぱり笑顔のまま、またも同じ台詞を吐き出した。

「これ？ 先生の趣味」

どういう教師だ！

「かちかち山じゃあるまいし」

アタシが文句を言った時である。「いいえ、どこにもない家です」と後方から声が届き、振り向くと、すらりとした男の人が立っていた。

「先生！ 椿ちゃん、美術部顧問の新堂先生だよ」学の表情がぱつと明るくなる。アタシはそれを意識しながら、時計に囲まれて佇む新堂先生を眺めていた。

彫刻みたいに綺麗な男だ、と、思った。

新堂先生はにつこり微笑んで、アタシと学を見比べた。

「西園寺くんが人を連れてくるなんて、珍しいですね。西園寺くんの恋人ですか？」

「従兄妹です」

と、学は即刻否定する。

「今日から編入してきた、東谷椿さんです。美術部に入るんです」

新堂先生は、「そうですか」と目を細め、アタシに向かって右手を差し出した。

「美術部顧問の新堂です。よろしく、東谷椿さん」

はあ、どうも、なんて言いながら、その手を握るアタシである。そしてそのまま、さつきから疑問に思っていたことを口にした。

「あの、どこにもない家って、どういう意味ですか？」

「ああ、ご存知ないですか」

残念そうな新堂先生である。

「ミヒヤエル・エンデのモモという作品に出てくる家ですよ。時計で埋め尽くされているんです」

「つまりその再現版？」

「そうですね。残念ながら、私はマイスター・ホラではありませんが」

全く意味が分からず、アタシは困り果ててしまった。すると、学がクスツと笑って口を開く。

「先生がマイスター・ホラなら、ぼくはカシオペアです」

その言葉に新堂先生も大いに笑い、

「では、東谷椿さんはモモですね。東谷さん、ようこそ美術部へ」
そう言って、またアタシの手を握るのだった。

不吉極まりない入り口に、カチコチ、チクタクうるさい廊下。極めつけは、彫刻のようなこの男。

わけわかんないところに来ちゃったなあと、横目で学を睨みながら、アタシは「よろしくです」なあんてのたまっていた。

とりあえず歓迎はされているらしい、と思ったからだ。

「ねえ、椿ちゃん。新堂先生って、すごくいい先生だと思わない？」

帰りのロールスロイスの中で、学は目をきらきらさせてそう言った。そうかな、と、アタシは返す。見学ということで見せてもらった美術部の顧問部屋に、これまたでかでかと、

「我々はどこから来たのか。我々は何者か。我々はどこへ行くのか」などと書かれた壁を発見してしまったからだ。

何ですかこれ、と尋ねたアタシに、新堂先生は説明してくれた。

「ゴーギャンの言葉です。大変感慨深いと思いませんか？」

その目があんまりにもうつとりしていたものだから、アタシは瞬時に思ったのだ。

美術部顧問は、変人だ。

それを学に伝えると、学はぎゃーぎゃー言いながらアタシの部屋ま

でついてきた。

「変人じゃないよ！ 新堂先生、優しくても知ってて、物静かで、ぼくの憧れなんだから！」

ああ、うるさいうるさい、とあしらうアタシである。

新堂先生の魅力について語り続ける学に視線をやって、アタシはふんと鼻で笑った。

「なによ、学。新堂先生のことそんなに褒めちゃってさ。ひよっとして恋でもしてんの？」

「え・・・・・・・・・・」

そこで西園寺学、一時停止。見るとどんどん顔が赤くなっていつて、アタシはその変化に驚いていた。

ほんのちよつとからかうつもりで言ったのに、何なんだ、その反応は。

「・・・・・・・・・・そうだよ」

困惑するアタシを差し置いて、学はそう、呟いた。

「ぼく、新堂先生のこと、好きだよ。恋だと思う。変だよ、気持ち悪いよね。でも、好きなんだよ」

思いがけないカミングアウトに、アタシはただ、呆然としていた。でもそのうち、目に涙をいっぱい溜める学が愛しくなって首を振る。

「別に、いいんじゃない？」

アタシのその一言に、学ははっと顔を上げた。

「恋してないよりは幸せだよ。恋愛なんて個人の自由なんだから、別にいいんじゃないの？」

「・・・・・・気持ち悪いとか、思わないの？」

涙声のまま学は尋ねる。アタシは笑って言ってやった。

「思っわけないじゃん。あんた、アタシの子分でしょ？ 親分はね、子分がどんなに変わったって、見捨てたりはしないもんなんだよ」

アタシの台詞に、学は一瞬、押し黙る。

それでもようやく言葉を吐き出で、出てきたのはお礼だった。

「ありがとう、椿ちゃん」

それと共に学の目から、涙が一粒零れ落ちた。

ヘンリー・ヒギンス今いずこ

学校から帰ったアタシ、三女・椿に、長女・牡丹と次女・桜は心配そうに眉根を寄せた。

「椿、どうだった？ お友達はできそう？」

「できなさそう」

夕食の席でそんな事を言ってしまったアタシの失態だと分かつてはいる。けれども、だからってこの状況には賛同できない。アタシ、三女・椿の言葉に不安を抱いた長女と次女は、揃って西園寺家長男・傑に泣きついた。それでアタシは今、長男・傑の部屋に軟禁されているというわけである。姉いわく、

「周りがお嬢様ばかりなら、椿もお嬢様になればいいじゃない！」

とのことだ。

すっかり困り果てた様子の長男・傑は、これみよがしに溜め息をついた。

「お前みたいな跳ねっ返り、どうやって調教しろっていうんだ」

これが彼の、第一声だったのだから。

「いいよ、そんな無理して牡丹姉ちゃんのご機嫌とんなくて」

悔しくなったアタシは、そう言つてそっぽを向いた。ポイント稼ぎの道具に使われたんじゃたまらない。

「何があつたんだ？」

長男・傑は、アタシの気持ちなんかがつつり無視してそう尋ねた。仕方なしに、アタシは放課後学に言つたことと同じ説明を彼にする。西園寺傑は、「ふうん」などと適当な相槌を打っていたかと思うと、にやりと笑つてアタシの頭に手を置いた。

「それは大変だったな。でも、今更お嬢様もないもんだろ」首をかしげるアタシに、傑兄ちゃんはにっこり笑う。

「俺はお前が変わつてなくて、正直安心したけどな」

「でもさ、話が通じないって、寂しいよ。おさびさびだよ」

アタシの言い方の何がおかしいのか、長男・傑はケラケラ笑う。そして、アタシの髪をぐしゃぐしゃにした。

「意味が分からないなら、聞けばいい。無理に合わせようなんてするな、お前らしくないぞ」

何をもつてアタシらしいとするのか尋ねることもないまま、アタシはただ、俯いた。その後に続けられた、

「椿は椿のままでいればいいんだ」

などという臭い台詞にアタシがどれだけ救われたかなんて、恥ずか

しくって言えやしない。単純だなあって自分でも呆れちゃうけどさ、でもこれで、アタシは答えを見つけた気がした。なあんだ、アタシ、このままでいいんだ、って。

お礼を言って部屋を出て行こうとするアタシに、傑兄ちゃんは声をかけた。

「椿、俺たちは家族なんだから、いつだって頼っていいんだからな」「うん、ありがとう、傑兄ちゃん。アタシ、頑張る」

おやすみと笑う傑兄ちゃんに同じ言葉を返しながら、アタシ、三女・椿は、なんだか誇らしい気持ちでいた。

この家に来てから初めて彼に対して素直になれた。その単純な事実、気持ちに静かに昂ぶっていた。

翌朝、アタシは歩いて登校した。大体車で十五分の距離を歩かないなんて、運動不足もいいところなのだ。

教室の前に立つ。深呼吸をする。アタシはアタシのままでいい。

東谷椿、十六歳。他人に合わせる心の広さなんて、あいにく持ち合わせてちゃあいない。

昨日はしずしず開けたドアを、今日は勢いよく全開にした。そして、叫ぶ。

「おはよー、みんなっ！」

穏やかに談笑していたお嬢様たちは、一瞬アタシにきよとしたようだった。けれども数秒後に、彼女たちの表情は笑顔になる。

「まあ、東谷様、ごきげんよう」

「ご機嫌うるわしゅう」

全くお嬢様って人種は、朝も早よからお上品だ。一瞬くじけそうになったけど、おしとやかなクラスメートたちに、アタシはあくまで「おはよー！」を貫いた。

朝礼のために聖書を出す。アタシの分は、まだ届いていなかった。傑兄ちゃんのお古であるそれを眺めて、アタシは安堵の溜め息をつく。

大丈夫だ。アタシには、嫌味なエリートがついている。

そして今日は、昨日と打って変わって楽しかった。

体育のために体操着に着替える最中、運動が苦手だというクラスメイトに、アタシは顔をしかめて同意する。

「だよね、体育なんて、超かったるくない？ アタシも運動オンチだからさあ」

すると言われたその子はクスツと笑って、

「東谷様って、ユニークな方でいらっしゃいますこと」それが褒め言葉なのか、それともけなし言葉なのかなんて、庶民たるアタシには分からない。だとするならば、褒め言葉と受け取ったほうが気が

楽だ。

「でしょ？ アタシってほら、エンターテイナーだからさ」

片目をつぶってそう言うアタシに、クラス中がクスクス笑った。

お嬢様たちのお嬢様言葉が、耳に心地よいと思える日がくるのを夢想する。それは、そう遠くない未来だろうという予感もあった。お古の聖書を握り締める。昨夜の傑のあの言葉たちが、アタシを元気付けている。そう感じた。

アタシの内側をぽかぽかと暖めるあの台詞。そうそれは、例えていうなら魔法のように。

マイ・フェア・レディになんて、なれなくていい。

アタシは、究極のシンデレラストーリーを思い描く。

素行の良くない花売り娘を淑女に変える、足長おじさんなんて必要ない。

アタシ、東谷椿十六歳には、花売り娘のままを受け入れてくれた、嫌味な西園寺傑二十五歳がついているから。

望むなら、平穩

ある週の日曜日、西園寺家の三兄弟と東谷家の三姉妹は、揃ってお出かけをした。行き先は遊園地。

お出かけの理由は長女・牡丹がみんなで遊びに行きたい、と言ったからで、場所の理由は次女・桜がジェットコースターに乗りたいと請うたからだ。

警察官の傑兄ちゃんとスポーツインストラクターの護兄ちゃんのお休みの日は重ならない。けれどもふたりは何とかスケジュールを調整し、日曜日のお出かけと相成ったわけである。

遊園地で、次女・桜は異様に張り切っていた。彼女は遊園地が大好きなのだ。それはもう、履歴書の趣味の欄に絶叫マシーンに乗ること、と書き込めるくらいだ。

アタシ、三女・椿はというと、じつはジェットコースターが苦手だったりする。あの浮遊感というか、生命力がぎりぎりになる感覚と云うか、あれがどうにも苦手である。

しかし、次女・桜は当然のようにジェットコースターの列に並び、アタシ、三女・椿はひとりで喚き立てていた。

「マジ無理！ 絶対無理！ 何でもするから勘弁してえ！」

こちらら必死なわけだが、それを見た次女・桜はニコニコしていた。

「大丈夫よ、椿。怖くないわよ。楽しいだけ」

「ジェットコースターなんて一瞬じゃねえか。乗ったらもう終わりだよ」

次女・桜の独りよがりすぎる言い分に、次男・護も尻馬に乗る。嫌だ、と叫ぼうとしたところで、実際そうしたのは三男・学だった。

「ぼくもやだ！ 無理だよ、こんなの！」

どうやら学も絶叫マシンが苦手のようなのだ。アタシはなんだか味方を得た気分になって、学とひしと抱き合った。

「学！ 無理よね、超無理よね！」

「無理だよお！ 椿ちゃん！」

泣き喚く三女と三男に目をやって、長女・牡丹は「まあどうしましよう」などと言っていた。

どうしましようもこうしましようもないだろう。無理なものは無理だ。

そう主張するアタシと学である。すると、次女・桜がこころ笑った。

「もう、可愛いわねえ、ふたりとも。でももう、チケット買っちゃったんだから」あんたが勝手に買ってきたんだらうが！

アタシは精一杯の恨みを込めてそう考えた。学も同じことを思ったらしい。「だったら」と、口を開く。

「傑兄ちゃんでも護兄ちゃんでも、どっちだっていいから隣に座って」

三男のその言葉に、四人の兄と姉は顔を見合わせた。

抱き合って震える末っ子を眺めて、長女・牡丹が長男・傑の袖を引く。

「傑さん、お願い。椿の隣に座ってあげて」

次女・桜も次男・護に懇願する。

「護くん、学くんと一緒に乗ってあげて」

ね、お願い。ふたり揃ったその言葉に、傑と護は頭をかいて、「仕方ねえなあ」と同時に言った。

そうして、嬉々として最前列に乗り込む姉たちを、アタシは三列目から驚愕の思いで眺めていた。全く理解できない。こんな恐ろしいものに、お金を払って乗るだなんて。

結局ふたりのお願いどおり、一列目に牡丹と桜、二列目に護と学、そして三列目に傑兄ちゃんとアタシ、という意味不明なペアが出来上がってしまった。

「いいか、椿」

シートベルトを下ろしながら、傑兄ちゃんが声をかける。

「一番上まで行ったら、とりあえず叫べ。それから、そのまま叫んだままでいる」

そうすれば怖くない、と笑顔で言われ、アタシは素直に頷いた。

「なんか、ごめんね？」アタシもシートベルトを下ろしながら、傑兄ちゃんに謝る。

「何が？」

「ほんとほ、牡丹姉ちゃんと乗りたかったでしょ？」

アタシが言つと、傑兄ちゃんは「なんだ、そんなこと」と、ちょっと笑った。

「気にするな。嫌々引き受けたわけじゃない」

「ありがとう」

そう小さく呟いたアタシの声を掻き消すように、前の列では学が護に抱きついている。

「絶対離さないでよ！？ 護兄ちゃん、終わるまでこのままでいてよ！？」

分かった分かった、と、呆れ半分の次男・護である。弟たちを眺めて、傑兄ちゃんは吹き出した。そして、「ほら」と左手を差し出す。

「終わるまで握ってやる。俺が隣にいるんだから安心しろ」

うん、と呟いて握ったその手は、ことのほか温かった。

ブザーが鳴る。胸がドキドキしている。隣の傑兄ちゃんを盗み見た。涼しそうな横顔。心臓が大きく動き、そしてそのまま早鐘を打つ。

これは吊橋現象だ、と、アタシは自分に言い聞かせた。

極限状態での胸の鼓動を恋のときめきと勘違いする、あの心理状態に違いない。

それからコースターはゆっくりと上り、かと思うと音速と勘違いするほどのスピードで駆け下りていった。恐怖のあまり、アタシにはその時の記憶があんまりない。だけど、左手。

アタシの右手に重ねられた傑兄ちゃんの左手の感触は、アタシの記憶に刻み込まれたままだった。

ジェットコースターでふらふらになったアタシを見て、次男・護は笑っていた。次女・桜はさすがに申し訳なく思ったらしい。

「今度は椿の好きなのに乗ろうね」と、取り繕うように微笑んできた。

それでアタシが指差したのは、お化け屋敷である。桜姉ちゃんはそれを見て、顔面蒼白になっていた。「桜姉ちゃん、アタシの好きなのでいいって、言ってくれたよね？」

アタシの質問に反論できない次女・桜は、半泣きのまま頷いた。

不安そうな学の肩を叩いてやる。

「見てよ、学。お化け屋敷の入り口」

アタシの言葉に顔を上げた学は、それを見てあつと声を上げた。

「なあんだ、部室の扉だあ。ぼく、これなら平気だよ」

でしょ？　なんて言いながら、アタシは改めて、美術部顧問の趣味の悪さに舌を巻いた。

お化け屋敷の入り口も、ロダンの「地獄の門」だったのだ。お化け屋敷と一緒に、どうなんだ？　そうは思ったけれども、まあこれは好都合。結果オーライ。アタシは笑顔で長女・牡丹に声をかけた。

「牡丹姉ちゃんは傑兄ちゃんと入りなよ。学、行こっ！」

駆け出すアタシを追いかけながら、学も声を張り上げる。

「護兄ちゃん！　桜ちゃんのこと、ちゃんと守ってあげなきゃだめだよーっ！」

それをバクミュージックに、アタシはこっさり安心していた。よしよし、ドキドキしてないぞ。やっぱりさっきのときめきっぽい奴は、ただの吊橋効果だったんだ。

豆粒かっつてくらい小さなペンライトを渡されて、アタシと学は真っ暗なお化け屋敷に踏み込んだ。

「このお化け屋敷、お化けが追いかけてくるんだって」

学はそんな説明を、ちよつと震えた声でアタシにしてくる。へえ、と相槌を打ったその直後、後ろからギイと嫌な音がした。そうつと振り向くアタシ、三女・椿と三男・学。

見ると、白衣を着たやせぎすの幽霊が、壁から出てくるところだった。

ぎゃあ、とふたり叫んで同時に走る。お化け屋敷の中は入り組んでいて、くねくねした曲がり道があったり階段があったりと、逃げ回るには少々不便だ。

おまけにお化けは歩いているのに、走っているアタシたちをどこまでも追いかけてきた。時には先回りしていたりもする。

もう走れない、と立ち止まったところで、アタシは隣で息を切らす学に声をかけた。

「ねえ、学。あのお化けさ、新堂先生にちょっと似てない？」

「何言ってるんだよ、椿ちゃん！」

予想に反して、学は大いに憤慨した。

「新堂先生はもっと上品だよ！ もっと知的で、もっと情緒的な人だよ！」

「あんた、本当に新堂先生のこと好きなのね……」

あまりの剣幕に、やっとのことで言い返すアタシである。学がもう一言、何か言おうと口を開いたその瞬間、アタシたちは肩を叩かれビクリと跳ねた。

いっせーの、で振り向くと、そこにはお化けが立っていた。

「わあーっ!!」

同時に、叫ぶ。そして同時に走って逃げた。

しばらく逃げ続けていると、通路の向こうがぼんやり明るい。出口だ、と、一気に安堵する。

「やったね」なんて笑いながら出口に向かうと、その瞬間無数の手がアタシたちを捕らえ、恐ろしくも愉快な感じでお化け屋敷は終了した。

「ああ、怖かったあ。でも面白かったね」

アタシは学に笑いかける。学も笑いながら賛同したが、次の瞬間にはどうしてだか怒り出した。

「椿ちゃん、さっきの続きだけど、あんなお化け、新堂先生には全然似てない!」

「そうお? 痩せっぽちなとことか、ふらふらしてるとことかそっくりじゃん」

アタシはそう言い返す。しかし学は、あくまでも否定的だった。

「全然似てないよ! だって先生は……」

そこで学の声は小さくなる。彼は俯いて、そしてぽつりと呟いた。

「だって先生は、あんなふうに、ぼくのこと追いかけてなんて来てくれない」

アタシはなんだかすつかり困ってしまつて、学を見た。学は恥ずかしそうにアタシに顔を向ける。

「……今の、ちよつとイタイ？」

「うん。大分イタイ」

アタシの言葉に、学は「椿ちゃんの性悪！」なんて言いながら、それでも笑顔だつた。

ひとしきり笑つた後、学は心配そうに出口を見やる。

「兄ちゃんたち、遅いね」

「桜姉ちゃんが気絶でもしてんのかな」

「桜ちゃん、そんなにお化け屋敷駄目なの？」

学の問いかけに、アタシは溜め息について頷いた。

「全然、駄目。ちよつと意地悪してやろうと思つただけなんだけど、やりすぎたかなあ」

アタシの心配をよそに、学は「大丈夫だよ」と笑う。

「護兄ちゃんがなんとかするよ」

「桜姉ちゃん足めつちや遅いから、護兄ちゃん絶対大変だと思うんだけど」

「じゃあ護兄ちゃんさ、桜ちゃんのこと、抱えて走ってるんじゃない？」

まっさかあ、なんて笑い飛ばした。けれども息を切らして出てきた次男・護は、その腕に次女・桜を、しっかりと抱いていたのだつた。

その光景にはさすがに唾然とする、アタシ、三女・椿と三男・学である。そんなアタシたちに気がついた次男・護が、次女・桜の背中をとんとんと叩いた。

「桜、もう終わったぞ。目え開ける。椿と学がこつち見てんぞ？」それを聞いて、桜姉ちゃんは恥ずかしそうに離れる。護兄ちゃんは自分から言い出したくせに、なんだかちよつと残念そう。そんなふたりをからかいながら、アタシたちは長男長女ペアを待っていた。

「あ、傑兄ちゃんたちだ！」
学がいち早く指をさす。

牡丹姉ちゃんと一緒に出てきた傑兄ちゃんは、意地悪そうに笑って弟妹たちに目を向けた。

「おつ、桜、気絶しなかったんだな？」

「うん、大丈夫。護くんが私のこと、抱っこして走ってくれたから嬉しそうに報告する、次女・桜である。次男・護は顔を赤らめて、
「馬鹿！ ばらすなよ！」なんて言っていた。

そのやり取りに、長男・傑は楽しそうに声を立てて笑った。

「なんだ、気絶しそうだったのは護のほうか」

なんて言って、護兄ちゃんに怒鳴られていた。

アタシ、三女・椿はというと、そんな言い争いは全く耳に入っていなかった。自分の視線の先に気がついて、アタシはひとりであうたえる。

傑兄ちゃんの大きな左手は、牡丹姉ちゃんの小さな右手と固く固く結ばれていて、離れる気配は全くなかった。

そんなことにうろたえている自分にうろたえた。さつきから何なんだろう、と、アタシは今日一日を振り返る。

ジェットコースターに乗った時からおかしかった。そう閃いて、そして、それは違つと瞬時に感じた。

ここ最近、アタシはずつとおかしかったんだ。そう、あの日、大丈夫だつて、傑兄ちゃんに言われた時あたりから。

それからコーヒーカップに乗つて、護兄ちゃんが回しすぎたために桜姉ちゃんの気分が悪くなつたり、嫌がる傑兄ちゃんを無理やりメリーゴーラウンドに押し込んだし、観覧車に六人で乗り込もうとして、係員さんに止められたりした。

楽しかった、と、思う。

結局三組に分かれるしかなかった観覧車の中で、アタシはひたすら学の話に耳を傾けていた。「気がついたら、もう先生のこと、好きだつたんだよ」と、学は言つた。

「最初は勘違いだと思つたんだ。だつて、好きつて気づく前、ぼくは先生と一緒に絵を見てたんだもん。その絵があんまり綺麗で、ぼくはすごくドキドキしてて。だから、そのせいだつて思つてたんだよ」

どうやって勘違いではないことに気がついたのか、と尋ねるあたしに、学は景色を眺めながらぼつぼつと語った。

「先生と離れると、寂しかったから。部活の時間が待ち遠しくて、部活に出たら出たで、今度は帰りたくなくなって。先生のこと、もっと知りたいって思ったんだ。それで、ぼくのことも知って欲しいって思うようになったんだよ」

先生が他の生徒と口きくだけで、腹立ってたまないんだよ、などと付け足して、学の話は終わった。それとほぼ同時に、ゴンドラが地上にさしかかる。

「兄ちゃんたちには、内緒ね」

悪戯っぽく微笑む学は、なんだかすごく、綺麗だった。

帰り道、長男・傑が運転する車の中で、アタシ、三女・椿は必死になって眠気と格闘しているところだった。

傑兄ちゃんも疲れてんのに、寝るのはなんだか申し訳ないなあ、なんて考えていたためだ。

それは、助手席に座る長女・牡丹も同じだったらしい。さっきからしきりにすぐる兄ちゃんに話しかけていて、そのおかげでアタシも寝ないですんでいた。

そんな涙ぐましい努力を末娘がしているとは露知らず、アタシの隣では学が爆睡している。三列シートの真ん中で、次女と次男も眠り

こけていた。

「傑さん、今日は本当にありがとう」

牡丹姉ちゃんの声が聞こえる。それに笑って、

「俺も今日は息抜きが出来たからちょうど良かった」なんて返す、
傑兄ちゃんの声も。

「警察なんて、大変よね」

そう呟いた牡丹姉ちゃんがふと声の調子を変えて、「みんな、寝ちやった？」と、こちらを向いた。

アタシは何でか分からないけど、とつさに目をつぶって寝た振りを決め込む。誰からも返事がないことを返答ととった牡丹姉ちゃんは、小さな声で傑兄ちゃんを呼んだ。

「ねえ、傑さん。さっきのこと、本当？」

さっきのことって、何だ？

アタシは続きが知りたくて、だけど知るのがすごく怖くって、目を開けるべきかどうか、しばらく迷った。その間にも牡丹姉ちゃんの話は続く。

「私、なんだか信じられなくて。だって、だって傑さんは……」

「俺がお前に、そんな冗談言つと思うか？」

「從兄妹だわ」

「法的には問題ない」

ぴしゃりと言い切った傑兄ちゃんの声聞きながら、アタシは雲行き怪しさを感じていた。

「でも、だけど……」
「牡丹」

溜め息と共に押し出された長女の名前に、アタシは飛び上がりそうなほどの恐怖を感じた。その持ち主は、アタシではないくせに。

「俺はお前の気持ちを知りたいと言ったはずだぞ？ お前が気にしてる家のことか、そんなもんに興味ないんだ」 厳しい口調のまま、傑兄ちゃんはそう言った。

聞きたくない、と、瞬時に思う。

今すぐにでも目を開けて、起きているとふたりに伝えてしまいたい。そしてそのまま、この会話をなかったことにしてしまいたい。

けれどもアタシの両瞼は、アタシの意志に反して糊付けされたようにぴったり塞がったままだった。心臓がまた、ドキドキする。それは先ほどとは打って変わり、不吉な予感を伴っていた。

この想いの意味に、気づきたくない強く願った。

「好きです」

ようやく発した長女・牡丹の呟きは、聞き取れないくらい小さかった。

「傑さんのこと、好き。大好き。ずっとずっと、傑さんのことが大好きです」

「俺も。俺も好きだ、牡丹。ずっと、お前のことを想ってた」

ああ、と、アタシは心の中で小さく嘆く。

聞きたくなかった。気づいていたけれど、アタシは鈍感なままでいたかった。

ふたりに感づかれないように、そっと瞼を押し上げた。信号待ちで止まった隙に、傑兄ちゃんの上体が牡丹姉ちゃんに向かって倒れ込む。

その唇の行く先は、決して知りたくなかないというのに。

気づいたら、好きになってた。学の言葉が蘇る。
好きになってた。気づいたら、アタシ、傑兄ちゃんのこと、こんなにも好きになっていた。でも、もう、遅い。

運転席と助手席で交わされる恋人たちの会話を聞きながら、アタシはひどく後悔していた。

気づかなければ良かったのだ。姉妹で同じ人が好きだなんて、そんな馬鹿馬鹿しい事実になど、気づかなければ良かった。

言えない、と、そう思う。きっとこの事実を公表できない。もしも願いが叶うなら、アタシはこのまま、平穏な日常を生きていたいから。

そうないものねだりをしたのが、アタシ、東谷椿十六歳の春のお話。

ガサツな男の苦勞話

西園寺家次男、西園寺護の日課は、朝と夕方のロードワークである。その距離、十キロ。

西園寺グループ代表取締役社長の肩書きを持つ彼は、じつはスポーツインストラクターで、役職は名ばかりなのか会社にはあまり顔を出さない。本人も西園寺家が持つ会社や財産にはまるで興味がないうのである。

そんな彼がある朝、アタシを誘っていつものロードワークに繰り出した。

アタシ、東谷椿十六歳。

現在夏休みをのんびりぼんやり過ごし中。

そしてあの春以来、長男・傑と長女・牡丹は、じつにこそこそと恋人同士を満喫していた。

「なんでアタシなの？」

そう尋ねると、護兄ちゃんは照れることもせずには踏ん返り返った。

「馬鹿野郎、ひとりで行くなんて寂しいじゃねえか」

今までひとりで行っていたのに、不思議な男だ。ははあ、こりやあ何かあるな、と、アタシは勘を働かせた。

「しょうがないなあ」

だから、アタシはそんな言葉で気がつかないふりをしてあげる。途端にほっとした顔になる護兄ちゃんを見上げると、なんだか毒気が抜かれてしまった。

護兄ちゃんは倉庫から自転車を引っ張りだして、「お前、これに乗ってけ」と、その鍵を投げてよこした。

しぶしぶ、と言った表情で、アタシはそれにまたがる。

「じゃあ行くか」

と声をかけて走り出した彼は、のっけから滅茶苦茶速かった。

ちなみに今日、学はいない。今頃は美術部の部室で自分の作品に取り掛かっているはずである。冷房の効いた涼しい部屋にいるだろう三男坊が羨ましい。

彼は、長期休み中にも新堂先生に会えるようにと、春の間に自分の作品を完成させなかったツワモノなのだ。

そんな学の思惑に気がついてるのはアタシひとり。西園寺家と東谷家の兄と姉は、真面目な三男を褒め称えていた。

もう東京都から出ちゃったんじゃない？　ってくらい、走りに走った先の公園で、次男・護は立ち止まった。どうやら折り返し地点のようだ。

肩でいきをするアタシを見て、護兄ちゃんは吹き出した。「お前、体力ねえなあ」

ニコニコする彼は、涼しい顔でそんな嫌味を言う。この筋肉馬鹿、

と、アタシは心の中で罵った。けれどもそれは口には出さない。出さないのではなく、出せない。疲れすぎて声も出なかった。

「ちょっと待ってろ」

アタシの様子を見ていた護兄ちゃんが、そう言い置いてどこかに行く。アタシは地面に座り込んで、Ｔシャツの裾をパタパタした。

「ほら」

程なくして戻ってきた次男・護は、それだけ声をかけてアタシにペットボトルのスポーツドリンクを差し出した。

「あ、ありがとう」

素直にお礼を言って、それを口に含む。ああ、冷たくって美味しい、と笑うアタシに、護兄ちゃんも笑顔になった。

ようやく落ち着いたアタシは、護兄ちゃんに声をかける。

「ねえ、話があるんならさ、こんな遠くまで来なくて良くない？」

その質問に虚を付かれたような顔をして、護兄ちゃんはアタシの隣にどかっと座った。

「お前、鋭すぎ。可愛くねえの」

そんなふうに口を尖らせ照れる彼は、ちょっと可愛い。

「八十六」

アタシが言つと、護兄ちゃんは「は？」と聞き返してきた。

「桜姉ちゃんのバストのサイズ。そういうのが聞きたいんじゃないの？」

「馬鹿！ そんなわけねえだろ！」

顔を真っ赤にさせて、護兄ちゃんは否定した。

まあ、なんて純情な男なんだと、アタシは少し笑ってしまう。そんなアタシを軽く小突いて、護兄ちゃんは額に手を置いていた。

「あのさ」と、彼は話し始める。

「桜、俺のこと、なんて言ってる？」

なあんだ、結局桜姉ちゃんの話なんじゃないか。アタシはすっかり呆れてしまって、それでもこの不憫な次男のために口を開いた。

「男らしい」

「それも聞いた」

「かつこいい」

「うん、それで？」

「頼りになる？」

「なんで疑問系なんだよ」

「このへたれ」

「桜そんなこと言ってたのか！？」

アタシの言葉を真に受けて、顔を上げる次男・護。相当切羽詰っているようだ。

「ううん、言ってない。アタシの感想」そう言うと、護兄ちゃんは

アタシの頭をゴツンとした。

「お前、生意気」

ぶたれた頭をさすりながら見上げる。その視線の先にいた護兄ちゃん、なんだかすごく、悲しそうだった。首をかしげて彼を見つめる。いつものふてぶてしさはどこへやら、護兄ちゃんは消え入りそうな声で呟いた。

「やべえ、俺、桜のこと好きだ」

その言葉を、アタシは黙って聞いていた。護兄ちゃんは寂しそうに俯いて、それでも本当に困惑した様子で、「どうしよう」などと言っている。

「俺、どうすりゃいいんだろうな。あいつといるとドキドキして、兄貴とあいつが喋ってんの見るとイライラして、すげえ、らしくねえ。俺、桜のこと、本気で好きだ」

分かる気がした。ドキドキする、イライラする。アタシは苦悶する護兄ちゃんを横目で眺めた。

「そんなこと、桜姉ちゃんに言ってよね」

あんたにはそうする権利があるんだから。

そんな思いが心を掠めたことは、絶対秘密だ。

「そりゃそつだ」

アタシの言葉になぜか納得したらしい護兄ちゃんは、そんなことを言って豪快に笑った。

「帰るか」

と、立ち上がる。

「アタシ、足がくがくなんですけど」

アタシがそう文句を言つと、護兄ちゃんは呆れながらもアタシを自転車の後ろに乗せて、それをこいで帰ってくれた。

「なあ、椿」自転車をこぎながら、護兄ちゃんはそう声をかける。

「なに？」

「お前、兄貴と牡丹ちゃんのこと、気づいてんだろ？」

「・・・・・・うん」

それだけ言つのが、精一杯だった。アタシの思いには気がつかないで、護兄ちゃんは続ける。

「もしあの二人が結婚なんてしたら、牡丹ちゃん、俺の姉貴になるんだよな」

結婚？ 考えてもみなかった。護兄ちゃんが無気なく発したその一言が、なんだかひどく、息苦しい。

「家族になるんだな。俺と、桜も」

そう呟いた護兄ちゃんの声が沈んでいるような気がして、ああ、この人も苦しいんだなあと、アタシはなんだか親近感を覚えていた。かつてアタシを安堵させた長男の発した家族というひとくくりは、次男にとっては忌むべきもののなのだ。その事実が、ひどく、重苦しい。

「でもまあ、関係ねえけどな」

突然言い出す次男・護は、アタシの葛藤などどこ吹く風だ。先ほどの苦悩はどこへやら、護兄ちゃんは自信満々に宣言した。

「従兄妹だろうが、なんだろうが、関係ねえよ。好きでなにが悪いんだよなあ？」

じつに清々しい男だ。アタシは驚きを隠せない。好きでなにが悪い。そんな単純な一言が、アタシの心に染み込んでいた。

西園寺家に到着すると、護兄ちゃんは早速笑顔で走って行った。元気な男だ、と思う間もなく、護兄ちゃんは視界から消える。

「ありがとな、椿。桜に言ってくる！」

去り際に聞こえた気持ちの吐露は、アタシに言葉を与えない。

そんな単純な、とは思ったけれども、何も言えなかった。好きな人に好きだと言える護兄ちゃんが、なんだかすごく、羨ましかった。

向日葵になりたくて

護兄ちゃんがどんな言葉で桜姉ちゃんに思いを伝えたかなんて、アタシ、三女・椿には知る由もない。だけど、桜姉ちゃんからの返事はすぐに分かった。だってあの運動オンチの権化とも言える桜姉ちゃんが、護兄ちゃんと走るためにスポーツウエアを買ってきたんだから。

そんなある日、夕食の席でのこと。次男・護は、「桜と付き合ってます」宣言をした。全員揃って、一瞬止まる。次女・桜は顔を赤くさせて俯き、長女・牡丹はにこやかに祝福した。長男・傑は呆れたような溜め息をつく。

「報告が遅い」

だ、そうだ。そう言われて、護兄ちゃんは口を尖らせた。

「なんだよ。兄貴だって、牡丹ちゃんのこと黙ってるくせに」

ぎょっとして護兄ちゃんを見たのは牡丹姉ちゃんだけだ。傑兄ちゃんは自信たっぷりに口角を上げる。

「そうだな、言ってなかった。付き合ってるよ」

さらりと普通に言われたことが、逆にずきんと胸に響いた。大々的に公表してくれたほうが、まだよかった。「牡丹とのことだけど」くらいの前置きが欲しかったのにと、アタシは知らず、俯いてしま

う。

「ごちそう、さまです」

アタシはそう呟いて席を立った。これ以上あの空気の中にいたら絶対酸欠になってしまう。

部屋のベッドに寝転んで、枕に顔をうずめながらぼんやりした。涙腺が緩まないことに、ひどく安堵する。

分厚い扉がノックされた。出たくないと感じて無視を決め込む。扉が開く気配はしたけれども、アタシはそのままの姿勢で身動きひとつしなかった。

「椿ちゃん」

入ってきたのは学だった。そつと枕から顔を上げて学を見ると、彼はトレーを持っていた。カクテルグラスがふたつ、仲良く並んでいる。

「デザート持ってきたよ」

一緒に食べよう、と笑顔で言っ、学はベッドサイドに腰を下ろした。

デザートのシャーベットを無言で食べる。しばらくの間、サクサクという軽快な音だけが部屋に響いた。

「ねえ、椿ちゃん」

空になったカクテルグラスを押しやって、学はおずおずと口を開く。

「どうかしたの？ 大丈夫？」

「どうもしないし、大丈夫だよ」

アタシはそう言い返したけれども、そんなはずがなかった。それに学は気がついていたんだと思う。「だけど」と呟いて、急に話題を変えたから。

「ぼくさあ、椿ちゃんが羨ましくって」

「羨ましい？ アタシが？」

うん、と、学は笑顔で頷く。

「だって椿ちゃん、シャキツとしててかっこいいし、しっかりしてて頭もいいし」

そんなことない、と、思った。アタシはここんどこ、自分でも嫌になるくらいうじうじしていた。それを自覚していたのに、学の瞳はアタシを捕らえる。

「それに、女の子だし」

そう続けた学の顔は、微笑んでいるのにどこか寂しそうだった。

「女の子なんて」

つまらないもんだよ、という言葉は、声に出さずに飲み込んだ。男の子だったらよかったのになんて、アタシは最近思い始めていた。もしもアタシが男の子だったら。傑兄ちゃんのがどんなに好きでも、この思いを諦めることも出来ただろうに。

アタシの思いなんて知らない学は、「羨ましいよ」と、もう一度言

った。

「だってぼくが女の子だったら、絶対新堂先生に告白してた。もし言えなかったとしても、卒業したらって希望も持てた。教師と生徒っていうただそれだけの障害に、酔うことだって出来たのに」

障害に酔うなで、と、アタシはぼんやり考える。

全然、いいもんなんかじゃないんだよ。なまじ自分が女なだけにもしかしたらなんて余計な期待持ちちゃって、どうせ苦しいのには変わりがない。

「この間ね」と、学は呟く。

「新堂先生と美術館に行ったんだ。そこに向日葵の絵が飾ってあって、右側から見ても左側から見ても、まっすぐこっちを向いているように見えるんだよ。新堂先生、その絵が大好きだって笑ってた。太陽の気分になれるからって。ねえ、椿ちゃん」

そこで学は一旦言葉を切って、アタシを真正面から見つめた。

「ぼくはその向日葵になりたい。新堂先生がどこにいても、まっすぐ先生を見ていたい」

そう語る学を見つめ返しながら、アタシは漠然と考えていた。アタシなら、その絵を眺める人になりたい。

アタシがどこにいても何をしていても、真正面から傑兄ちゃんに見つめていて欲しい。

小さな望みは叶えられない。それが分かっているから、この願望は、ひどく大それたものを感じられた。

「アタシは太陽になりたいよ」

アタシがそう呟くと、学はにっこり微笑んだ。

「椿ちゃんも恋してるんだね。ねえ、間違ってたら怒ってね。その相手って、傑兄ちゃん？」

「……うん」

誰にも言うまいと思っていたのに、気がついたら素直に認める自分がいた。けれど、そうしたことではたかが外れてしまったのか、アタシの口は思うままにまくし立てる。

「ばつかみたいよね。傑兄ちゃんは、牡丹姉ちゃんのもんなのに。」

お姉ちゃんのカレシを好きになっちゃうなんて、最低すぎて笑っちゃうわよね」

「笑わない」

きつぱりと、学は強く言い切った。

「ぼくはいいと思うんだ。だって心は自由だもん。恋するのにルールなんか、ないもん。好きな気持ちに上下関係なんか、絶対ないって、ぼくは思う」

それを聞いて、嬉しい気持ちと悲しい気持ちが一緒になってアタシを襲った。嬉しい気持ちは、アタシの恋を否定しないでくれたから。悲しい気持ちは、きつと学が、そう考えないことには自分の思いを認めることが出来ないのだろうと、気づいてしまったから。

アタシたちのこの思いは、一体どこへやったら良いのだろう。

学とふたりで夜通し語った。アタシたちの、世間には受け入れてもらえないだろう気持ちについて。ふたりで一緒にいっぱい笑い、そして涙が枯れるほどたくさん泣いた。

牡丹姉ちゃん、ごめんなさい。アタシは心の中でそつと謝る。牡丹姉ちゃんと愛し合う、傑兄ちゃんに恋しています。

泣き疲れたアタシたちは、結局そのまま一緒に眠った。これがアタシ、東谷椿十六歳の、夏のお話。

目覚まし時計が鳴った朝

学校が始まって、アタシ、三女・椿はまた戦場に駆り出されることになった。名門私立のお嬢様の環の中へ。

夏休みと同じように、アタシは「おはよう」を繰り返した。お嬢様たちはにこやかに対応する。

「東谷様、ごきげん麗しゅう。夏休みはいかがお過ごしでしたの？」

それがさあ、と、アタシは話し始めた。

「うちの次女と学んこの次男がデキちゃってさ」

ところがクラスメートの大半は、デキたの意味が分からないようだった。全員、小首を傾げてアタシを見ている。

「付き合ってたんの」

と言い直すと、その瞬間、厳密に言えば十秒後、ええっ、と驚きの声が上がった。

「従兄妹同士じゃございせんこと？」

「うん。でも護兄ちゃんは、好きなんだからそんなもん関係ねえって言ってたよ」

「まあ……」

という呟きは、全員一致だ。それから更に十秒後、「なんて素敵！」とみんなは言った。

「ラブロマンスですわね。みなさん、憧れでしょ」

「だよ。こっちも恋したくなっちゃうよね」

そうしてアタシたちの話は恋バナに発展していった。サッカー部のキャプテンがかっこいいだの、野球部のエースは優しいだの、女の子同士の他愛ない会話。

夏休みの間に知り合った男の子に恋している、などというお嬢様のカミングアウトを聞きながら、アタシはここがホームになったことを実感していた。

ここは戦場。でも敵地じゃない。

そう思えるようになったことが、アタシには何より嬉しかった。

しばらくすると担任教師が入ってきて、アタシたちはししぶしぶばらけた。朝礼が始まったので聖書を取り出す。アタシの聖書はとつくの昔に届いていた。だけど、アタシはそれを使うことが出来ずにいる。未練がましく傑兄ちゃんのお古を使う自分を危ないなあとは思うけど、と、アタシはぼろぼろの聖書を開いた。

これだけでも手元に置いておきたいと望むのを、アタシはアタシに許してあげたい。

放課後になり、アタシは久々の部活に、でももうビビったりはしなかった。学が恋した場所だと思うと、なんだか感慨深くすらある。久々に顔を合わせた新堂先生は、相変わらず静かに微笑む彫刻のようだった。やっぱりあのお化け屋敷のオバケに似ていると思ったのは、学には内緒にしておこう。

「東谷椿さん、お久しぶりです。夏休みはいかがでしたか？」

「片道五キロのロードワークに、意味なく付き合わされたりしました」

柔らかな笑顔を浮かべる新堂先生の頭の上に、クエスチョンマークが見えた気がした。なんか美術部員っぽいこと言わなきゃ駄目かな、と、アタシはもう一度口を開く。

「向日葵の絵の話をしてたり」

「向日葵の絵？」

聞き返した新堂先生に、おや、と思った。一緒に見に行っただけではないのか。

そう尋ねると、新堂先生は「参ったなあ」などと言って頭をかいた。

「本当は良くないんです。特定の生徒を連れまわすのは。でも、そうですね。西園寺君、喋ってしまったんですね」

「超浮かれてました」

アタシが言うと、新堂先生は「そうですね」と笑みを深めた。

「あの、それってえこひいきとか、そういう話になっちゃうからですか？」

「そうですね。私は、そう言われても仕方のないことをしていると思います」

「それって、つまり、先生は……」

学のこと、特別に目をかけてくれてるの？

そう尋ねたかったけれども、出来なかった。心情的な問題ではない。部室に入ってきた学が、「椿ちゃん！」と、半ば叫ぶようにアタシを呼んだからだ。

「先生となに話してたの？」

学の慌てように、アタシはすっかりしどろもどろになっていた。別に悪いことしたわけでもないのだから、そうする必要は全くないのだが。

すると新堂先生が、アタシと学を見比べて少し笑った。

「大丈夫ですよ、西園寺君。東谷さんを取ったりしませんから」

そうじゃないのに、と、思った。それは学も同じように感じていたに違いない。アタシはなんだか居たたまれなくなってしまうて、ちらっと学に目をやった。学は下を向いていて、唇を噛んでいるようだった。そして、言う。

「ほんとに、もう、先生やめて下さいよ。椿ちゃんは、ぼくの親分なんですから」

「親分？」

不思議そうな新堂先生に、学は頷いた。

「そうです。ぼくはずーっと、椿ちゃんの子分なんです」ね、椿ちゃん。そう言っただけで向けられる学の笑顔が、アタシにはなんだかすごく痛々しく見えた。

「そうでしたか」

新堂先生はにっこりと笑う。そして、人差し指を口元に立ててみせた。

「ですが西園寺君。いくら親分さん相手でも、おしゃべりは駄目で

すよ」

悪戯っぽく言う先生に、学は「はい！」と片手を上げる。

「もう言いません。内緒にします、新堂先生」

笑っておどけるしかない学の気持ちが、手に取るように分かった。笑うしかないんだ、アタシたちは。アタシは傑兄ちゃんを思い出す。笑っておどけて、頭の悪いふりをしていなければ、アタシも学も、きつと壊れてしまうから。

それを実感したのは、その日、西園寺家に帰ってからだった。

学も夏休みが終わると同時にアタシと一緒に歩いて登下校していたから（護兄ちゃんは猛反対してたけど）、アタシたちは二人一緒に帰路についていた。

玄関を開けたアタシを出迎えたのは、旅に出ていた母だった。

「椿、おかえり」

「お母さん？」

につこりと笑顔で佇む母を見て、アタシの語尾が上がったのは無理もない。手にはアカギレ、髪はぼろぼろだった筈の母親は、着ている服も立ち姿も、美しく洗練されていたからだ。

「お昼寝バカンスはどうしたの？」

「一時帰国」

アタシの質問に、母はにこにこしながらそう返した。

「私の可愛いお花ちゃんたちが、ちゃんと枯れずに育っているか見に来たの」

そんな台詞の後で、母は学に目を向ける。

「あら、学くん、こんにちは。相変わらず可愛いわね」

こんにちは、などと律儀に頭を下げる学である。すっかり呆れるアタシをよそに、母は我が物顔で西園寺家の奥へと進んだ。

「船の旅って本当に豪華よ。色んな人に求婚されたけど、全部断ったの」

西園寺家のリビングで、母は「うふふ」などと笑いながら報告した。その隣で、叔母が溜め息をついている。

「あなたばかりモテるんだもん。そんなのずるい」

「未亡人ってオイシイの」

ほほほ、などと笑う母である。そんな母を、叔母はぎろりと睨んだ。

「どうせ私は既婚者よ。上の息子はもう二十五よ」

そんな悪態をつく叔母に、母は苦笑し、「あら、私だって、上の娘は二十五よ」と言い返していた。そして、「いいじゃないの」と、叔母をなだめる。

「パリに行けば、義兄さんに会えるんだから」

その言葉でアタシは初めて、亡くなった父の兄、つまり学たちの父親が、パリにいることを知ったのだった。

「そうよ！ それなのに、傑が呼びつけたりするから！ パリ目前

だったのよ!？」

母の言葉で憤慨する叔母である。

「傑兄ちゃんが呼んだの？」

と尋ねると、母は黙って頷いた。

そしてその夜、仕事から疲れて帰ってきた傑兄ちゃんを出迎えたのは、何を隠そう、叔母の怒声であった。

「傑！ あんたって子は、人を呼びつけておいて遅いじゃないの！」

夜十時のことだ。全員が集まるリビングで、それまで護兄ちゃんや牡丹姉ちゃんたちとモノポリーに興じていた彼女は、傑兄ちゃんを見るなり目を吊り上げてそう叫んだのだ。

「仕方ないだろ、仕事だったんだから」

うんざりした表情で言い返す傑兄ちゃんを、叔母は「ふん」と鼻で笑う。

「相変わらずワーカホリックなのね。お父さんそっくり。やんなっちゃうわ」

むっとして何か言おうとした傑兄ちゃんを牽制して、護兄ちゃんが笑い声を上げた。

「兄貴、勘弁してやれよ。母さん、ゲームで負けていらだってたんだよ」

「口はばつたいこと言わないでちょうだい、護」

叔母はぴしゃりと言いつつ。そして、傑兄ちゃんに視線を戻した。

「で？ 傑、母さんのこと呼び出したからには、それなりの話があるんでしょね？」夫との再会を邪魔された叔母は、恐ろしく気分を害していた。そんなに怒ることなのかとアタシは首を傾げたけれど、戸惑っているのはどうやらアタシたち東谷家の三姉妹だけみたいだった。母や西園寺家の三兄弟は、普通の顔で彼女を見ている。

「もちろん」

と、傑兄ちゃんは口角を上げた。

「西園寺家の存亡に関わる重大な話だよ、母さん」

「あら、大袈裟。じゃあ、まあ、聞きましょうか」

叔母はそう言つて椅子の背もたれに身体を預け、長い足を組み替えた。

傑兄ちゃんはツカツカとこちらに歩み寄り、アタシの隣に座つていた牡丹姉ちゃんの肩を抱き寄せる。大丈夫、と言つように、その手は数回、牡丹姉ちゃんの二の腕をさすった。

「牡丹を西園寺家の嫁に迎えます」

「は？」

この反応は、東谷家長女・牡丹を除く全員がしたものだ。牡丹姉ちゃんは頬を赤らめて、叔母に向かってお辞儀をした。

「そういう運びになりました」

牡丹姉ちゃんのそんな小声を遮って、「ちょっと待って」と声をかけたのは、アタシたちの母だった。

「あなたたちが再会したのって、確か今年の春先でしょ？」

そうよ、と、牡丹姉ちゃんは肯定する。

「いつから付き合ってるの？」

「春の終わりごろ」

「で、いつプロポーズされたの？」

「この間……」

この間って、と、鸚鵡返しをした母に、傑兄ちゃんが付け足した。

「母さんたちを呼んだ、前日の夜です」

母はそれを聞いて、素早く計算を張り巡らせているようだった。そして、叫ぶ。

「展開、早っ！ ちょっと待ってよ、結婚適齢期だからって、いくらなんでも展開早くない？」

「別に、適齢期だからとか、そんなんじゃないわ」

牡丹姉ちゃんは、それだけ言って俯いた。

「アタシさっ」

と、アタシ、三女・椿は叫び声を上げる。そして席を立ち、「アタシ」と、もう一度呟いた。

「なんか関係なさそうだし、もう寝るねっ」

そうまくし立てるように言って、あたしはリビングを飛び出した。閉めた扉の向こうから、「幸せにします」と言う傑兄ちゃんの声に耳を塞いで、なんだか逃げてばかりだと、アタシは情けなさのあ

まり泣きそうになった。

夜明けまでには

逃げている途中、アタシは部屋の前で学に腕をつかまれた。見ると学は泣いていて、アタシは慌てて彼を部屋の中に引っ張り込んだ。扉を閉めて、鍵をかける。

ただそれだけの作業を終わらせたただけなのに、アタシの息は上がっていた。

「椿ちゃん」

学の小さな呼びかけに、アタシは返事もしなかった。変わりにアタシの口について出たのは、嗚咽混じりの素朴な疑問。

「なんで、あんたが泣くのよお」

それに学は、「だって」と、こちらも涙声で言うのだった。

「だって、分かつちゃうんだ。関係ないって言うしかない、椿ちゃんの気持ち分かつちゃうんだよ」

学に背を向けたままだったアタシは、ゆっくり彼に振り返る。ああ、アタシたちは、と、アタシは流れる学の涙をぼんやり見つめた。

同じ穴のムジナなんだ。片や同性の部活顧問、片や従兄妹で姉の恋人。馬鹿らしくって、笑い話にもなりやしない。

けどあんたはまだいいよ。先生が、異性愛者とは限らないんだから。

そう呟いたアタシに、学は悲しそうに首を振った。

「新堂先生ってさ、ルノアールも好きなんだ」

言葉の意図が読めずに、アタシは学に目で問いかける。

「夏休みにさ、新堂先生とルノアール展にも行ったんだ。大きなリボンをつけた女の子の絵の前で、新堂先生が言ったんだよ。忘れられない人がいるんです、って。いい年をして彼女を未だに引きずっているなんて、って」

学はそこで言葉を切った。目に浮かぶようだった。彫刻みたいな青白い顔の先生が、その絵を見上げる情景が。そしてそれを隣で見つめる、学の暗い瞳の色が。

「結局アタシたちは、ごまかしていくしか道はないってことよね」

アタシが言っと、学は「そうだよ」と、肯定した。

「ごまかしながら生きるしかないんだ、ぼくたちは」

それも、自分の心に対して。

その考えに、アタシは絶望感を抱いていた。二人向き合ったまま、涙をぬぐうこともしないで、ただ、相手を見つめた。決してお互いを見てはいないことを、共に理解していながら。

学の視線の先には新堂先生が佇んでいて、アタシの瞳には傑兄ちゃんしか映っていないのだ。思う人との視線とは、決して交差しないと知っているのに。

それから二人で、また泣いた。

夜明けまでには、と、アタシは窓の外を意識しながら、ただ願う。
この夜が明ける前に、空が白み始める前に、涙も彼に対する思いも、
枯れ果ててしまえばいいのに。

君を守ると誓います

その話を次女・桜から聞いた時、アタシ、三女・椿は、我が姉がならなんと損な性分なのかと呆れてしまった。

東谷家の母を震撼させた傑兄ちゃんの告白劇から数日後、アタシと学は護兄ちゃんに言われて、彼の部屋を訪れていた。

母と伯母はまた世界一周お昼寝バカンスとやらに繰り出して、晴れて親族も認める婚約者同士となった長男長女は、今頃ふたりでデイナーを楽しんでいるはずである。

「護くんと、結婚しないことにしたの」

と、次女・桜はそう言った。

「したかったけれど、無理でしょう？」

どうして無理なのだ、と、アタシと学はふたり同時に抗議した。

「傍系血族なら、四親等からは結婚したっていいはずじゃん！まだ大丈夫なんじゃないの？」

「じゃあ、ふたりは別れるの？ そんなことで諦めちゃうの？」

揃って声を荒げる末っ子たちに、護兄ちゃんは「まず落ち着けよ」なんて溜め息をついた。

「ふたりで話し合って決めたことなの」

桜姉ちゃんはゆったりした口調で説明する。

「法律上は、結婚できると思うわ。多分。でも、傑お兄ちゃんと牡丹お姉ちゃんが従兄妹の壁を越えて結婚して、それで、私と護くんまで結婚したら、どうなると思う？」

どうなるかなんて、分からなかった。分かっているのは、なんだかその選択に納得できないということだけだ。黙っていると、桜姉ちゃんはおも続けた。

「きつと悪い噂が立つわ。根も葉もないこと言われるわ。西園寺の名前にも傷が付くと思う。私ね、そんなの嫌なのよ。私のことで、護くんに余計な負担かけたくないの」

「だったら一体どうすんの？ ふたりに愛の逃避行でもするつもり？」

尋ねたアタシに、次女は「まさか」と少し笑った。

「そんなことしないわ。護くんに、家をすてさせたりなんてしない」
「だったら・・・・・・・・」

アタシが言いかけると、それまで黙っていた護兄ちゃんが、小さく息を吐き出した。「桜を」と、彼は言う。

「俺の内縁の妻にする」

「内縁って・・・・・・・・」同時に発したアタシと学の呟きには、憤怒の色がこもっていたんだと思う。桜姉ちゃんは幾分か慌てた様子で、「ふたりとも、お願いだからおしまいまで聞いて」と懇願した。

「婚約届けは提出しない。書類上は従兄妹のまま、夫婦になるって決めたんだ」

どうしてそんなことすんの！？
そう叫びだしたい衝動に駆られた。そして、実際にそうしたのは、アタシではなく学だった。

「護兄ちゃんは、それでいいの？ 桜ちゃんが本当の奥さんになら

なくっても平気なの？」

「そうだな」

そう呟いた護兄ちゃんの目はほんの少し赤くって、彼が悩んで悩んで出した答えなのだと思い知った。

「平気かって言われると、平気じゃねえよ。でも、桜はそれでいいって言うてくれたんだ。俺はそれで、十分だと思ってる」

「法律上は夫婦じゃないけど」

桜姉ちゃんが口を開いた。

「私、護くんと一緒にいられるなら幸せよ。護くんがずっと傍にいてくれるなら、私、西園寺の名前なんて、なくてもいい」

そんなのおかしい、と憤るアタシに苦笑して、護兄ちゃんは大きな手の平をアタシの頭にぽんと乗せた。

「椿、そんな顔すんな。婚姻届なんて、あんな紙つぺら一枚に保証してもらわなきゃならねえような、やわな気持ちじゃねえんだよ」
黙り込んだままのアタシに、護兄ちゃんは困っているようだった。

アタシの頭に置いた手を左右に動かしてぐしゃぐしゃする。

「あんな紙切れなくなつて、俺が桜を守るから」

だから、な？ 安心しろよ、なんて笑顔で言われて、アタシのほうこそ困惑した。傍らでは桜姉ちゃんが、学に語りかけている。

「学くんの大切なお兄ちゃんを、不幸なんかに絶対しないわ。護くんのことが好きって気持ち、神様に誓えなくなつて構わない。だから今、学くんに約束する。私、護くんのことを、一生好きなままです」

この真ん中つこたちは、真剣なのだ。そう思った。

きつとふたりで何十時間と話し合つて、きつとふたりで悩みぬいて、泣いた夜もあつたに違いない。

もう何もいえない、と、思った。

何を言ってもふたりは頑として首を縦には振らないだろう。ふたりの決意を変えられるほどの決意が、アタシにも学にもあるとは思えなかった。

「分かった」

そう呟くと、護兄ちゃんは傑兄ちゃんに、桜姉ちゃんは牡丹姉ちゃんに、絶対に秘密にしてくれと懇願した。

「兄貴のことだから、俺たちがそんなこと考えてるって知ったら、無駄に悩むに決まってる」

「牡丹お姉ちゃんのことだもの。結婚話を白紙に戻すわ」

揃ってそんなことを言うこの恋人たちに、アタシと学は、ただ頷くことしかできなかった。

ありがとう、なんてふたりに言われて、アタシたちはなんだか変な気持ちになった。どうしてそこまで気を使うのか。愛し愛されているくせに。好きだと言える関係のくせに。

なんて、贅沢な。

そう思ったのは否定できない。

そして、そんなことを考えてしまう自分に嫌悪を覚えた。隣の学が同じように感じているのにも気がついていた。

アタシたちの恋愛は、結婚なんて夢の夢。思いを吐露することも、出来やしない。

そんなことをひしひしと痛感した。

これがアタシ、東谷椿十六歳の、秋のお話。

幸福のただ中

ある日アタシ、三女・椿は、新堂先生にルノアールの絵について聞いてみた。大きなリボンをつけた女の子の絵の話。

それを口にしたただけなのに、彼は「おしゃべりですね」と恥ずかしそうに笑った。

「いえ、あの、別にそういうわけじゃ……」

アタシのとつさの言い訳も、新堂先生には通じないようだ。「西園寺くんが言ったんでしょ？」と尋ねられて、アタシは観念して頷いた。

「初恋だったんですか？」

聞くと、新堂先生は首を振る。

「初恋ではありません。最後の恋です。彼女以上に愛しく思える女性、きっと生涯現れないでしょう」

「じゃあもう一生、恋はしないんですか？」

「しないのではなく、出来ないんです。東谷 椿さん、私の部屋に飾ってあったゴーギャンの言葉、覚えていますか？」

『我々はどこから来たのか。我々は何者か。我々はどこへ行くのか』
覚えていまずと答えたアタシに、新堂先生はほんの少し俯いた。口元には、笑みをたたえたまま。

「あれは、私の心そのものなんです。彼女に対する想いがどこから来て、あんなにも私を蝕んだあの気持ちは何者で、叶えられなかった恋はどこへ行ったらいいのか模索している。答えはどこにもありません。どんなに時計の針が進んでも、抜け出すことは出来ないでしょう」

そんなことを言う新堂先生は、どこか遠くを眺めていた。そして、
「東谷 椿さん」とアタシを呼ぶ。

「大切な人が出来たら、想いを伝えないとイケませんよ」

それは出来ない。そう思った。
だけど、口に出すのは憚られた。「はい」と殊勝に頷くアタシに、
新堂先生はにっこりと笑う。

「みんなが噂していますよ。西園寺くんのいとこの東谷 椿さんは魅力的だと」

えっ、とアタシは声を上げる。

「アタシ、そんなにモテてます？」

アタシが尋ねると、新堂先生は頷いた。

「ええ、大人気ですよ。女生徒に」

女生徒かよっ！

思わずズッコケたアタシに、新堂先生は声を上げて笑った。

「そのうち男子生徒の耳にも入りますよ。恋人が出来たら教えて下さい。職員室で賭けをしているので」

「賭け？」

聞き返したアタシに、新堂先生は悪びれもせずに答えた。

「ええ。賭けです。学校一人気の西園寺くんが親分と慕う東谷 椿さんを射止めるのはどの生徒か、教員同士で賭けをしているんですよ。やはり、各部活のキャプテンが有力ですね」

教師がそんなことしていいのか？！

目は口ほどにものを言う。言わなかったけれど、新堂先生はいたずらっぽく微笑んだ。

「内緒ですよ」

なんて、秘密の多い部顧問だ。

その翌日から、まるで謀ったかのようにアタシのもとには来訪者が増えた。一体全体どういうわけ？と首を傾げるアタシに、クラスメートはただ、笑う。

「わたくしの兄、図書委員をしておりますの。東谷様は、どんな物語がお好みですか？」

とか、

「双子の弟がサッカー部に所属しておりますの。よろしければ、東谷様も見学あそばして？」

とか、

「わたくしの幼なじみですけど、東谷様のお話ばかり聞かされますのよ。彼、オペラに興味がおありなの。東谷様、一緒にコンサートなどいかが？」

とか。

つまるところ、アタシに興味を持つ男に近い女の子がやって来るのだ。

えーい、情けない！

と、アタシはすっかりホームグラウンドと化したクラスの中で憤る。

アタシに用があんのなら、直接アタシのツラ見てもの言え！

そんなアタシに、「東谷様のそんなところが」と、クラスのみんなは笑う。

「みなさん、憧れる理由のようでしてよ」

「どこが?! アタシなんてガサツだし、ズケズケもの言うし、口悪いし、女の子らしいとこなんてひとつもないじゃん!

アタシが男だったら、絶対みんなを嫁にしてるよ!」

そう言うのと、クラスメートたちは眉根を寄せてたしなめた。

「他の場所では、おっしやらないほうがよろしいわ。東谷様とお近づきになりたいのは、むしろ女性の方々ですもの」

じゃあ何か? 男にかこつけて、アタシはじつは女の子たちにモテているのか?

その話を学にすると、彼は腹を抱えてゲラゲラ笑った。

「なんであんたはそう笑うのよ!」

「だってだって、椿ちゃん、確かに女の子って感じじゃないんだもん。女親分って感じだもん」

もしくはボスとかアニキとか、なんて言う学の後ろ頭をはたいてやったのは、西園寺家でのことだ。

一緒に聞いていた護兄ちゃんや桜姉ちゃんも笑っている。

「確かにお前は、女の子って感じじゃねえよなあ」

と、次男・護。

それを聞いて、桜姉ちゃんはニコニコした。

「いいじゃないの、椿。私安心したわ。好きな人が出来たら、1番に教えてちょうだいね」

もういるんだよ、という言葉は飲み込む。

あんたの姉貴のカレシだよ。

あんたの旦那の兄貴だよ。

言えないなあと、アタシはこっそり溜息をついた。

ふらふらと部屋に戻る。ふて腐れたみたいにベッドにごろんと横になって、アタシはひとり考えていた。

みんなに好かれるのは、すっごくすっごく、嬉しいことだ。けどさ、と、アタシは溜息と共に考える。

本当に好きな人に好かれなきゃ、そんなの全部、ないのと同じ。

そう思い付いて、アタシは少し、うろたえた。

ああ、アタシもおんなじだったんだって、思い出しちゃったから。

傑兄ちゃんの好きな人は何を隠そう東谷 牡丹で、東谷 椿では、

ない。

西園寺 傑にとって重要なのは牡丹姉ちゃんとの未来であって、アタシの彼に対する想いは、ないのと同じ。

そこでアタシは、自分の頭をポカポカやった。

ええい、暗いぞ、東谷 椿！いつものパワーはどこ行っただ！

そんなふうには自身を奮い立たせたその日の夜、アタシ、東谷 椿 1
6歳は、自分の非力さを思い知る。

「椿、学校で人気あるんだってな」
仕事から帰って来た傑兄ちゃんが、アタシにそんなことを言ってきた。

思わずアタシは学をにらむ。

すると彼は、「ぼく知らないよ」とかぶりを振った。

「桜から聞いたんだ。大喜びだったぞ」

傑兄ちゃんの弁解に、アタシは桜姉ちゃんに目を向けた。…傑兄ちゃんがほだいたネクタイを、牡丹姉ちゃんが受け取る場面を見ないように。

「だって、嬉しいじゃない」

次女・桜は取り繕う。

「椿には、幸せになってほしいもの」

その一言に、護兄ちゃんがどう思うのか分かってるのか？
そう思ったけれども、黙っておいた。

桜姉ちゃんは嬉しそうで、そんな彼女を見つめる次男は幸せそうだったから。

「どんな人に好かれているの？」

そう尋ねたのは長女・牡丹だ。
知らないよ、とアタシは返す。

「男の子は、直接アタシのそこには来ないもん。頼まれた女の子が来るんだもん」

わあカワイイ、と呟いたのは、次女・桜だった。

「男の子たちは照れてるのね。カワイイ」

そんなことを言う桜姉ちゃんの頭を、護兄ちゃんがパシンと叩いた。

「痛あ。もう、護くん何するのお」

「俺の前で他の男なんか褒めんじゃねーよ」

そう言ってそっぽを向く次男・護である。そんな弟を目の当たりにして、傑兄ちゃんは笑い出した。

「狭量な奴だな。お前そんなに自信がないのか」

「…兄貴みてーな兄貴持つて、どう自信持つて言うんだよ」

それを聞いて、傑兄ちゃんは「ちよつと待て」と牽制した。

「俺が完璧なのは仕方ないとしてだな、もっと余裕を持ったらどう

なんだ」

護兄ちゃんはその言葉にむっとしたのか、桜姉ちゃんの腕を掴んで立ち上がった。

「うつせーよ、馬鹿兄貴！桜、部屋行くぞ！」

そして桜姉ちゃんをぐいぐい引つ張る。

傑兄ちゃんは笑いながら、「おい、護！」と声をかけた。

「壁が厚いからって、あんまり無理させるなよ？」

うつせーんだよ！と言う護兄ちゃんの怒声に、傑兄ちゃんはまたひとしきり笑うのだった。

「傑兄ちゃん、言い過ぎ。護兄ちゃんがかawaiiそう」兄二人のやり取りを見ていた学がそう呟いた。

「護兄ちゃん、じつは繊細なんだから」

それはないだろと思うアタシの横で、傑兄ちゃんはひとつ唸って腕を組んだ。

「そうだな。どうもあいつは、一途と言うか、女に対してぐずぐずしてると言うか」

「大事にしてんでしょお。ぼくは護兄ちゃんのああいうとこ、好きだけど」

呆れる長男に、溜息をつく三男である。

「学、お前はあそこまではなるなよ」なんて、傑兄ちゃんは釘を

さした。

「… なっちゃうかも」

学はそう言って、傑兄ちゃんを慌てさせた。「俺の心配事をこれ以上増やすな」とのことだ。

心配事と言えば、と、それまで聞き役に回っていた牡丹姉ちゃんが、アタシに顔を向けて口を開いた。

「椿、お願いだから変な男の子には引つかからないでね。ちゃんとした子でなきゃ、お姉ちゃん認めませんよ」

「母親か、お前は」

そう突っ込んだ傑兄ちゃんに、牡丹姉ちゃんは抗議する。

「だってだって、椿はまだ小さいんですもの。私、心配で心配で」そんなことを言って瞳を潤ませる長女・牡丹に、傑兄ちゃんは大いに笑った。

「分かった分かった。よし、椿。好きな男が出来たら連れて来い。俺が直々に品評して、ダメだと言ったらすぐに別れる」

連れて来い、なんて。アタシは思わず下を向いた。

鏡でも持って来ればいいのか。

そんなアタシを見やって、慌てているのは学だった。「はいはい」なんて言って、アタシは席を立つ。そのまま部屋に向かったら、背後から学の怒声が聞こえた。

「傑兄ちゃんの、馬鹿っ！！」

きつと傑兄ちゃんは、意味が分からず立ち尽くしているんだろうな。そう思うと、アタシは滑稽なほどの悲しみに、酔うことも出来なかった。

部屋のドアが叩かれて、学だろうなと考えた。けれども予想に反して部屋に入って来たのは、ばつの悪そうな傑兄ちゃんだった。

「椿」

呼ばれてアタシは顔を上げる。けれどもすぐに俯いた。今、自分がどんな顔をしているのか分かっていたから。

「悪かった」と、傑兄ちゃんはそう言った。

「お前の気持ちも考えずに」

傑兄ちゃんを見る。知ってたの？ アタシの気持ちに気付いてたの？ そうだ、この人、刑事なんだ。

そう思うと血の気が引いた。審判を待つ罪人の気分で、アタシはただ、傑兄ちゃんの言葉を待っていた。

「これから俺の妹になるんだと思うと、つい……。変なこと言って悪かった。口出しなんかしないから、恋人が出来たら会わせてくれるか？」

アタシは返事が出来なかった。気付かれてなかったんだという安心

感と、相手にもされない空虚な気持ちが、手に手をとってアタシを襲った。

ごまかさなくちゃ、何とかしなきゃ。

アタシは自分を励ましてみる。

口の両端に力を入れて、笑って何かを言わなくちゃ。

「…当ったり、前じゃん」

顔を上げて、傑兄ちゃんを見なくっちゃ。

「絶対、超いい男、連れて来るんだから」

さあ、笑うなら、今。

「だから…」

あと一言。心配しないでって、それだけ言わせて。お願いだから、ねえアタシ、泣いたりなんてしないでよ。

「だから…」

「椿？ どうした」

向き合う傑兄ちゃんにそう聞かれて、アタシは自分がもう泣いているのに気が付いた。

傑兄ちゃんは、ちょっと困ったように微笑んで、アタシの頭をよしよしした。

もうダメだった。涙腺はアタシを待ってはくれなかった。その事実

を思い知って、アタシは、傑兄ちゃんに泣きついた。
大声を出して、小さな子供のように泣く。

傑兄ちゃんは、アタシをギュッと抱きしめて、背中をトントン叩いてくれた。

「悪かった、椿。ごめんな」

謝ってなんか欲しくない。そう思った。もしも悪いと思うなら、アタシの気持ちに気付かないことに対して謝ってよ。

そんなことを恨みがましく考えてしまう自分が情けなかった。何でこのタイミングで泣くのよ、と、アタシは自分に罵声を浴びせる。子供みたいに泣きついて、いい加減にしてくれない？ 傑兄ちゃんはアタシのことなんか、これっぽっちも愛してないんだから。揃ってそんなことを言うこの恋人たちに、アタシと学は、ただ頷くことしかできなかった。

ありがとう、なんてふたりに言われて、アタシたちはなんだか変な気持ちになった。どうしてそこまで気を使うのか。愛し愛されているくせに。好きだと言える関係のくせに。

傑兄ちゃんは困惑している。それでもアタシは泣き続けた。

そんな自分に嫌悪を覚えるかたわらで、泣いていれば傑兄ちゃんはアタシを抱きしめてってくれるなんて、卑怯な打算があったから。

ようやく涙も枯れた頃、傑兄ちゃんはアタシの目元を長い親指で拭ってくれた。鼻をすすするアタシに笑いかけて、彼は言う。

「お前が学校で、上手くやってるみたいで安心した」
目で問いかけるアタシに、傑兄ちゃんは自信満々に口角を上げる。

「俺の言った通りだったろ？そのままでもいいんだって」

頷くと、アタシの目から残っていた涙がポロンと落ちた。それを見て、傑兄ちゃんは「また泣くのか」と少し笑う。そして、そのまま地べたにどかと座った。

「ほら、来い椿。泣き止むまでギューしてやるよ」

そう言つて、傑兄ちゃんは両手を広げた。アタシは膝を折って彼に抱き着く。

もう涙は出て来なかった。今こそ泣けたらいいのにと、不謹慎にもそんなことを考えていた。

好きだよ、と、傑兄ちゃんの腕の中でアタシは思う。

傑兄ちゃんの背中に腕を回して、「俺の妹は泣き虫だな」なんて言葉には耳を塞いで、今だけは、西園寺 傑を独占したい。

それが精一杯アタシを慰めようとしている傑兄ちゃんに対しての裏切り行為だと、分かっていた。

分かっただけで止められなかった。

きつと生涯最高となる幸福のただ中で、アタシ、東谷 椿16歳は、新堂先生の言葉を思い出していた。

傑兄ちゃんに対するこの想い。

これは一体どこから来て、これは一体何物で、そしてどこへ行った
らいいのだろうか。

答えは出ないと先生は言った。

アタシだって、別に答えを知りたいわけじゃない。

ただ、その問題を抱えたままでも構わないから、今この時の幸福が、
永久に続けばいいと願うだけ。

チクタク時計が掻き消したもの

優しい人だともっぱら噂の野球部エースは、噂通りの優男だった。いや、見た感じの話じゃなくて。

放課後のことである。アタシ、東谷 椿16歳は、名も知らぬ彼から呼び出しをくらってここに来ていた。なんとまあ、ベタなことに体育館裏。

君のことが好きなんだと、たった一言彼は言った。

どーすりやいいんだ、こういう時？！

アタシは困りすぎてしどろもどろ。

頬を染める彼を見て、アタシはただ立ち尽くしていた。自慢じゃないけど、アタシ、東谷 椿。16年間生きてきたけど、異性に告白されたことなど一度もない。

「えっと…。なぜアタシ？」

疑問をそのまま口にする。すると彼は、当然のように言い切った。

「君がとても魅力的だから」

ひえーっ、である。そんなことを臆面もなく言える彼は何者か。審美眼は大丈夫なのかと、アタシは本格的に心配した。しかしアタシの思惑露知らず、彼は耳まで染めて呟いた。

「お友達になつてくれませんか？」

「え？ 友達？」

聞き返すアタシである。どうやらからかっているわけではなさそうだと感じたのは、彼の顔が相当せっぱつまっていたから。

なあんだ、と、アタシは知らず笑っていた。

「そんなんだったら全然オツケー。だったら今からアタシらツレだね」

「…ツレ？」

聞き返した彼に、ああ通じないのかと思い至る。

「友達ってこと」

言い直すと、彼は、「本当ですか？」と、目を輝かせた。

そう尋ねられて、アタシは不思議な気分になった。たかが友達になるのに、ちよいと大袈裟すぎやしないか？

「ほんと、ほんと。そっぴゃさ、名前何ていうの？」

「竹内 行弘と申します」

ユキヒロは丁寧にな乗って一礼した。

「ユキヒロね。分かった。アタシのことは椿でいいよ」

アタシが言つと、彼は嬉しそうに笑った。「では、部活があるのでなんて言つて駆けて行く。」

ずいぶんお上品だな、野球部エース。

アタシはそんなことを考えて、ちよつと笑った。

そんなことが起こった数日後、アタシはクラスメートとおしゃべりしていた。例によって恋バナである。

クラスメートが大切そうに出したネックレスを、見せてもらった時のことだ。

「誰に貰ったのー？」なんて、分かってるくせに聞くのは、女の子の礼儀。

予想通りその子は顔を赤らめて、

「わたくしのいい人に」

と呟いた。

「いい人って、カレシのことでしょ？ いいなあ」

アタシが言うと、その子にはっこり微笑んだ。

「ええ、わたくしのツレですの」

「…はっ？」

ぽかんとするアタシに、クラスメートは不思議そうな顔をした。

「東谷様、いかがいたしました？ 交際相手のこと、ツレとおっしゃるのでしょうか？」

待て待て待て！

「誰に聞いたの?!」

「野球部の方々、みなさんそうおっしゃってよ」

まあ、わたくし、何か間違っておりますかしら、なんて、その子はクラスメートを仰ぎ見た。見られた側も首を傾げる。そして、極めつけはこの一言。

「だって東谷様、野球部の竹内様にそうおっしゃったのでございましょう?」

確かに言ったよ、言いましたとも。でも待って、と、アタシは混乱したまま制止する。

「友達になってくれて言われたんだよ? それってイコール付き合ってたって意味になっちゃうの?」

アタシのあまりのパニックっぷりに、みんなは神妙な顔をして頷いた。

「ついに東谷様のおめがねに適う殿方のお出ましですわねって、みなさん噂していらっやいますのよ」

ああ、この今の気持ちを表すのに、と、アタシはがっくりとうなだれる。良家の子供に通じる言葉はないものか。

それからアタシは、いろんな人に尋ねて回った。

野球部エース、竹内 行弘について。

なんてったって、どのクラスかも分からないのだ。知っているのは名前と部活、ただそれだけ。

そんなことでカレシとカノジヨと言えるのか？！

幸い、野球部エースとだけあって、彼は有名人のようだった。クラスのみんなは、アタシにそのつもりがないと分かると何だか残念がりながらも教えてくれた。

「教室までは存じませんが、2年生でいらっしやいますわ」

なんとまあ、彼は先輩だったんですか。そう目を丸くするアタシに、クラスメートは呆れていた。

野球部エースはよほど名が通っているようだ。

「先輩に断る時ってさ、何て言ったらいいのかな？」

その質問に、答えは返ってこなかった。

「その場でお断りになりませんと……」だそうだ。なんてこったい。

ああ、東谷 椿、一生の不覚！

とりあえず学に相談しようと、アタシは放課後になるのを待ち続けた。

帰りのホームルームが終わってから、学のクラスに直行する。しかし彼はいなかった。

こんな時にどこ行ったんだ、と理不尽にも憤慨するアタシに、学のクラスメートが、部活に行ったのではないかと教えてくれた。

仕方なく、美術部部室に走って行った。入口である『地獄の門』の

前で、アタシは思わず立ち止まる。門には紙が貼り付けられていた。

『美術部に所属されている皆さんへ。』

諸事情により、本日お休みさせて頂き下さい。

部室にご用のある方は、職員室にて鍵をお借りして下さい。

美術部顧問 新堂 尚樹

紙にはそう書かれていた。

へえ、新堂先生の名前って尚樹っていうのか、なんて、感心している場合ではない。だったら学はどこにいらんだと、アタシは悔し紛れに部室の扉をガタガタ揺らした。

するとカチツと音がして、扉はアタシを招き入れた。

誰かいるのかと、アタシは時計だらけの廊下を進んだ。もし学がいなくても、誰かいるなら聞けばいいのだ。

生徒の作品が置いてある部屋から声が聞こえて立ち止まる。休みの日にまで作品に取り組む生徒の邪魔をしないようにと、アタシは極力音を立てないようにドアを開けた。中を覗く。いるのは学ひとりだった。

目当てのものが見つかったのに、アタシには声をかけることが出来なかった。

学はただ、立っていた。ただ立って、彼は教室の前方を見つめていた。

「好きです」

と、声が聞こえて、その主が学なのだと気付く。

「先生のことが、大好きです」

最後は涙声になりながら、それでも学はしゃがみ込むこともしないで、ただその言葉を繰り返していた。

好きですと、たった4文字の愛の言葉を。

アタシはというと、学の気持ちの深さを、改めて思い知っていた。自分の心に気が付かないふりをして、ごまかしながら生きるしかないアタシたちの恋心は、聞く人もない場所では吐露できない。

「新堂先生…っ」

学はきつと泣いているんだと、アタシはぼんやり考えていた。大切な人が出来たらちゃんと伝えるように、とアタシに諭した美術部顧問は、自分に恋する男の子に、そうする隙を与えない。

悲しいとか、やり切れないとか、そんな言葉で学に同情することは出来なかった。アタシに出来ることといったら、学の告白を聞きながら、嗚咽を漏らさないように喉に力を入れること。

ただそれだけ。

アタシはなんて役立たずなんだと、学を見つめながら途方に暮れた。飛んで行って抱きしめることも、新堂先生に罵声を浴びせることも、アタシには出来ない。

そんなに辛いならやめちまえ。そう学を説得することも出来ないのだ。

学は立ちんぼうのまま、新堂先生の名前を呼び続けていた。大好きですと、自分の気持ちを添えながら。

アタシはまた、物音を立てないように気を配りながら、美術部部室をあとにした。通路に所狭しと並べられたアナログ時計の出す音が、学のかき消してくれることを、ただ、願う。

直接言うことなんて出来ないから、今この時だけでも、学に堂々と言わせてあげて。

新堂先生にいただいた想いは、世界で1番ピュアだから。

結局頼みの綱である学の助言を得られずに、アタシは野球部の使うグラウンドに歩いて行った。ベンチに座って、野球部は談笑している。

休憩中だ、と、アタシは何だか気まずくなった。だけどその時のアタシは必死すぎて、全員の見える前で竹内 行弘に向かって、頭を下げて謝った。

「ごめんなさい！ アタシ、友達ってマジ普通の友達のことだと思ってました！ 付き合うとか、そういうのじゃないと思ってて、だから」

いざとなると、言葉って浮かんでこないもんだなって、ちらっと思う。

わめき散らすアタシを、野球部全員が不思議そうに見上げていた。

「えっと…、東谷さん、どうしたんですか？」

困惑顔でそう尋ねる竹内 行弘である。

どーしたもこーしたもねーやい！

アタシはすっかりパニックに陥って、ただひたすらに頭を下げた。

「ごめんなさい！ アタシ、好きな人いるんです！ 付き合えないです！ すいません！」

それだけ叫んで、アタシは引き止める行弘の声を振り払うように走り出した。

自分のしたことに後悔したのは、校門を飛び出してしばらく走った後だった。

うおーっ、言っちゃったー！

好きな人がいるなんて、あんな公衆の面前で叫ぶだなんて。

ああ、と、アタシはうなだれる。

東谷 椿、16歳。一生の不覚が、一生の恥になりました。「しないのではなく、出来ないんです。東谷 椿さん、私の部屋に飾ってあったゴーギャンの言葉、覚えていますか？」

『我々はどこから来たのか。我々は何者か。我々はどこへ行くのか』
覚えていまずと答えたアタシに、新堂先生はほんの少し俯いた。口元には、笑みをたたえたまま。

「あれは、私の心そのものなんです。彼女に対する想いがどこから来て、あんなにも私を蝕んだあの気持ちは何者で、叶えられなかった恋はどこへ行ったらいいのか模索している。答えはどこにもありません。どんなに時計の針が進んでも、抜け出すことは出来ないでしょう」

そんなことを言う新堂先生は、どこか遠くを眺めていた。そして、
「東谷 椿さん」とアタシを呼ぶ。

「大切な人が出来たら、想いを伝えないといけませんよ」

それは出来ない。そう思った。
だけど、口に出すのは憚られた。「はい」と殊勝に頷くアタシに、
新堂先生はにつこりと笑う。

「みんなが噂していますよ。西園寺くんのいとこの東谷 椿さんは魅力的だと」
えっ、とアタシは声を上げる。

「アタシ、そんなにモテてます？」

アタシが尋ねると、新堂先生は頷いた。

「ええ、大人気ですよ。女生徒に」

女生徒かよっ！

思わずズッコケたアタシに、新堂先生は声を上げて笑った。

「そのうち男子生徒の耳にも入りますよ。恋人が出来たら教えて下さい。職員室で賭けをしているので」

「賭け？」

聞き返したアタシに、新堂先生は悪びれもせずに答えた。

「ええ。賭けです。学校一人気の西園寺くんが親分と慕う東谷 椿さんを射止めるのはどの生徒か、教員同士で賭けをしているんですよ。やはり、各部活のキャプテンが有力ですね」

教師がそんなこととしていいのか？！

目は口ほどにものを言う。言わなかったけれど、新堂先生はいたずらっぽく微笑んだ。

「内緒ですよ」

なんて、秘密の多い部顧問だ。

その翌日から、まるで謀ったかのようにアタシのもとには来訪者が

増えた。一体全体どういうわけ？と首を傾げるアタシに、クラスメイトはただ、笑う。

「わたくしの兄、図書委員をしておりますの。東谷様は、どんな物語がお好みですか？」

とか、

「双子の弟がサッカー部に所属しておりますの。よろしければ、東谷様も見学あそばして？」

とか、

「わたくしの幼なじみですけど、東谷様のお話ばかり聞かされますのよ。彼、オペラに興味がありなの。東谷様、一緒にコンサートなどいかが？」

とか。

つまるところ、アタシに興味を持つ男に近い女の子がやって来るのだ。

えーい、情けない！

と、アタシはすっかりホームグラウンドと化したクラスの中で憤る。

アタシに用があんのなら、直接アタシのツラ見てもの言え！

そんなアタシに、「東谷様のそんなところが」と、クラスのみんなは笑う。

「みなさん、憧れる理由のようでしてよ」

「どこが?! アタシなんてガサツだし、ズケズケもの言うし、口悪いし、女の子らしいとこなんてひとつもないじゃん!

アタシが男だったら、絶対みんなを嫁にしてるよ!」

そう言うと、クラスメートたちは眉根を寄せてたしなめた。

「他の場所では、おっしゃらないほうがよろしいわ。東谷様とお近づきになりたいのは、むしろ女性の方々ですもの」

じゃあ何か? 男にかこつけて、アタシはじつは女の子たちにモテているのか?

その話を学にすると、彼は腹を抱えてゲラゲラ笑った。

「なんであんたはそう笑うのよ!」

「だってだって、椿ちゃん、確かに女の子って感じじゃないんだもん。女親分って感じだもん」

もしくはボスとかアニキとか、なんて言う学の後ろ頭をはたいてやったのは、西園寺家でのことだ。

一緒に聞いていた護兄ちゃんや桜姉ちゃんも笑っている。

「確かにお前は、女の子って感じじゃねえよなあ」
と、次男・護。

それを聞いて、桜姉ちゃんはニコニコした。

「いいじゃないの、椿。私安心したわ。好きな人が出来たら、1番に教えてちょうだいね」

もういるんだよ、という言葉は飲み込む。

あんたの姉貴のカレシだよ。

あんたの旦那の兄貴だよ。

言えないなあ、アタシはこっそり溜息をついた。

ふらふらと部屋に戻る。ふて腐れたみたいにベッドにごろんと横になって、アタシはひとり考えていた。

みんなに好かれるのは、すっごくすっごく、嬉しいことだ。けどさ、と、アタシは溜息と共に考える。

本当に好きな人に好かれなきゃ、そんなの全部、ないのと同じ。

そう思い付いて、アタシは少し、うろたえた。

ああ、アタシもおんなじだったんだって、思い出しちゃったから。

傑兄ちゃんの好きな人は何を隠そう東谷 牡丹で、東谷 椿では、ない。

西園寺 傑にとって重要なのは牡丹姉ちゃんとの未来であって、アタシの彼に対する想いは、ないのと同じ。

そこでアタシは、自分の頭をポカポカやった。

ええい、暗いぞ、東谷 椿！いつものパワーはどこ行ったんだ！

そんなふうにより自身を奮い立たせたその日の夜、アタシ、東谷 椿 16歳は、自分の非力さを思い知る。

「椿、学校で人気あるんだってな」
仕事から帰って来た傑兄ちゃんが、アタシにそんなことを言ってきた。

思わずアタシは学をにらむ。
すると彼は、「ぼく知らないよ」とかぶりを振った。

「桜から聞いたんだ。大喜びだったぞ」

傑兄ちゃんの弁解に、アタシは桜姉ちゃんに目を向けた。…傑兄ちゃんがほだいたネクタイを、牡丹姉ちゃんが受け取る場面を見ないよう。

「だって、嬉しいじゃない」

次女・桜は取り繕う。

「椿には、幸せになってほしいもの」

その一言に、護兄ちゃんがどう思うのか分かってるのか？

そう思ったけれども、黙っておいた。

桜姉ちゃんは嬉しそうで、そんな彼女を見つめる次男は幸せそうだったから。

「どんな人に好かれているの？」

そう尋ねたのは長女・牡丹だ。

知らないよ、とアタシは返す。

「男の子は、直接アタシのそこには来ないもん。頼まれた女の子が来るんだもん」

わあカワイイ、と呟いたのは、次女・桜だった。

「男の子たちは照れてるのね。カワイイ」

そんなことを言う桜姉ちゃんの頭を、護兄ちゃんがパシンと叩いた。

「痛あ。もう、護くん何するのお」

「俺の前で他の男なんか褒めんじゃねーよ」

そう言ってそっぽを向く次男・護である。そんな弟を目の当たりにして、傑兄ちゃんは笑い出した。

「狭量な奴だな。お前そんなに自信がないのか」

「…兄貴みてーな兄貴持つて、どう自信持つて言うんだよ」

それを聞いて、傑兄ちゃんは「ちよつと待て」と牽制した。

「俺が完璧なのは仕方ないとしてだな、もつと余裕を持ったらどうなんだ」

護兄ちゃんはその言葉にむっとしたのか、桜姉ちゃんの腕を掴んで立ち上がった。

「うつせーよ、馬鹿兄貴！桜、部屋行くぞ！」

そして桜姉ちゃんをぐいぐい引つ張る。

傑兄ちゃんは笑いながら、「おい、護！」と声をかけた。

「壁が厚いからって、あんまり無理させるなよ？」

うつせーんだよ！と言う護兄ちゃんの怒声に、傑兄ちゃんはまたひとしきり笑うのだった。

「傑兄ちゃん、言い過ぎ。護兄ちゃんがかわいそう」兄二人のやり取りを見ていた学がそう呟いた。

「護兄ちゃん、じつは繊細なんだから」

それはないだろと思うアタシの横で、傑兄ちゃんはひとつ唸って腕を組んだ。

「そうだな。どうもあいっは、一途と言うか、女に対してぐずぐずしてると言うか」

「大事にしてんでしょお。ぼくは護兄ちゃんのああいうとこ、好き

「だけど」

呆れる長男に、溜息をつく三男である。

「学、お前はあそこまでにはなるなよ」なんて、傑兄ちゃんは釘をさした。

「…なっちゃうかも」

学はそう言って、傑兄ちゃんを慌てさせた。「俺の心配事をこれ以上増やすな」とのことだ。

心配事と言えば、と、それまで聞き役に回っていた牡丹姉ちゃんが、アタシに顔を向けて口を開いた。

「椿、お願いだから変な男の子には引つかからないでね。ちゃんとした子でなきゃ、お姉ちゃん認めませんよ」

「母親か、お前は」

そう突っ込んだ傑兄ちゃんに、牡丹姉ちゃんは抗議する。

「だってだって、椿はまだ小さいんですもの。私、心配で心配で」そんなことを言っただけを潤ませる長女・牡丹に、傑兄ちゃんは大いに笑った。

「分かった分かった。よし、椿。好きな男が出来たら連れて来い。俺が直々に品評して、ダメだと言ったらすぐに別れる」

連れて来い、なんて。アタシは思わず下を向いた。

鏡でも持って来ればいいのか。

そんなアタシを見やって、慌てているのは学だった。「はいはい」なんて言って、アタシは席を立つ。そのまま部屋に向かったら、背後から学の怒声が聞こえた。

「傑兄ちゃんの、馬鹿っ！！」

きつと傑兄ちゃんは、意味が分からず立ち尽くしているんだろうな。そう思うと、アタシは滑稽なほどの悲しみに、酔うことも出来なかった。

部屋のドアが叩かれて、学だろうなと考えた。けれども予想に反して部屋に入って来たのは、ばつの悪そうな傑兄ちゃんだった。

「椿」

呼ばれてアタシは顔を上げる。けれどもすぐに俯いた。今、自分がどんな顔をしているのか分かっていたから。

「悪かった」と、傑兄ちゃんはそう言った。

「お前の気持ちも考えずに」

傑兄ちゃんを見る。知ってたの？ アタシの気持ちに気付いてたの？ そうだ、この人、刑事なんだ。

そう思うと血の気が引いた。審判を待つ罪人の気分で、アタシはただ、傑兄ちゃんの言葉を待っていた。

「これから俺の妹になるんだと思うと、つい……。変なこと言って悪

かった。口出しなんかしないから、恋人が出来たら会わせてくれるか？」

アタシは返事が出来なかった。気付かれてなかったんだという安心感と、相手にもされない空虚な気持ち、手に手をとってアタシを襲った。

ごまかさなくちゃ、何とかしなきゃ。

アタシは自分を励ましてみる。

口の両端に力を入れて、笑って何かを言わなくちゃ。

「…当ったり、前じゃん」

顔を上げて、傑兄ちゃんを見なくっちゃ。

「絶対、超いい男、連れて来るんだから」

さあ、笑うなら、今。

「だから…」

あと一言。心配しないでって、それだけ言わせて。お願いだから、ねえアタシ、泣いたりなんてしないでよ。

「だから…」

「椿？ どうした」

向き合う傑兄ちゃんにそう聞かれて、アタシは自分がもう泣いているのに気が付いた。

傑兄ちゃんは、ちょっと困ったように微笑んで、アタシの頭をよしよしした。

もうダメだった。涙腺はアタシを待つてはくれなかった。その事実を思い知って、アタシは、傑兄ちゃんに泣きついた。大声を出して、小さな子供のよう泣く。

傑兄ちゃんは、アタシをギュッと抱きしめて、背中をトントン叩いてくれた。

「悪かった、椿。ごめんな」

謝ってなんか欲しくない。そう思った。もしも悪いと思うなら、アタシの気持ちに気付かないことに対して謝ってよ。

そんなことを恨みがましく考えてしまう自分が情けなかった。何でこのタイミングで泣くのよ、と、アタシは自分に罵声を浴びせる。子供みたいに泣きついて、いい加減にしてくれない？ 傑兄ちゃんはアタシのことなんか、これっぽっちも愛してないんだから。揃ってそんなことを言うこの恋人たちに、アタシと学は、ただ頷くことしかできなかった。

ありがとう、なんてふたりに言われて、アタシたちはなんだか変な気持ちになった。どうしてそこまで気を使うのか。愛し愛されているくせに。好きだと言える関係のくせに。

傑兄ちゃんは困惑している。それでもアタシは泣き続けた。

そんな自分に嫌悪を覚えるかたわらで、泣いていれば傑兄ちゃんはアタシを抱きしめてってくれるなんて、卑怯な打算があったから。

ようやく涙も枯れた頃、傑兄ちゃんはアタシの目元を長い親指で拭ってくれた。鼻をすするアタシに笑いかけて、彼は言う。

「お前が学校で、上手くやってるみたいで安心した」

目で問いかけるアタシに、傑兄ちゃんは自信満々に口角を上げる。

「俺の言った通りだったろ？そのままでもいいんだって」

頷くと、アタシの目から残っていた涙がポロンと落ちた。それを見て、傑兄ちゃんは「また泣くのか」と少し笑う。そして、そのまま地べたにどかと座った。

「ほら、来い椿。泣き止むまでギューしてやるよ」

そう言って、傑兄ちゃんは両手を広げた。アタシは膝を折って彼に抱き着く。

もう涙は出て来なかった。今こそ泣けたらいいのにと、不謹慎にもそんなことを考えていた。

好きだよ、と、傑兄ちゃんの腕の中でアタシは思う。

傑兄ちゃんの背中に腕を回して、「俺の妹は泣き虫だな」なんて言葉には耳を塞いで、今だけは、西園寺 傑を独占したい。

それが精一杯アタシを慰めようとしている傑兄ちゃんに対しての裏切り行為だと、分かっていた。

分かっただけで止められなかった。

きつと生涯最高となる幸福のただ中で、アタシ、東谷 椿 16 歳は、新堂先生の言葉を思い出していた。

傑兄ちゃんに対するこの想い。

これは一体どこから来て、これは一体何物で、そしてどこへ行っただろうか。

答えは出ないと先生は言った。

アタシだって、別に答えを知りたいわけじゃない。

ただ、その問題を抱えたままでも構わないから、今この時の幸福が、永久に続けばいいと願うだけ。

例えばの話

アタシ、東谷 椿が野球部エース、竹内 行弘をふったというのは、またたく間に学校中に広まった、らしい。

『らしい』というのは、当のアタシの耳に入って来たのがそれからずいぶん後だったからだ。リークしたのはもちろん、あの親切なクラスメートの女の子たちで、どうやらアタシの『好きな人がいます』宣言に興味津々のようだった。

「どんな方でいらっしゃいますの？」

そう尋ねられて、アタシはただ、苦笑していた。「あれ嘘なんだ」なんておどけるわけにはいかないし、かと言って本当のことなど話せない。

繰る日も繰る日もその質問。アタシはちよつと、疲労困憊。学校から帰るとそのまま就寝、そんな日が数える程度に続いていた。

そんなある日、アタシ、東谷 椿16歳は、気付けば東谷 椿17歳になっていた。

17と言えば、すっかり大人！ と意気込んでみせた末っ子に、長女と次女は揃って嘆き悲しんだ。

「まだまだ小さな椿でいてほしい」

なんて、身勝手なものいいとこだ。

「そんなかまぼこ板みてえな胸して、どこが大人なんだよ」

次男・護はそう言って笑った。そんな弟をたしなめて、愚痴るいとこを慰めて、傑兄ちゃんは誕生日パーティーを提案した。

だから今日、アタシは、ちょっとおめかし。

桜姉ちゃんに借りたワンピースで、牡丹姉ちゃんにアレンジしてもらった髪型で、アタシはちょっとブルーだった。

なぜかと言うと、今日はアタシの誕生日であるが、この期に及んで長女・牡丹が、

「椿が生まれたのは23時を過ぎてたの。だからまだ、椿は16歳なのよ」

と、のたまったからだ。

そんなん知るか！ である。

急遽開催されたパーティーだからお客もない。誕生日パーティーで「プレゼント何がいい？」などと聞かれたのは初めてだ。

こんなめでたい祝いの席で、アタシはぼんやりと窓の外を眺めていた。

お願いだから、人の誕生日にかこつけて、バーボンを一気飲みするのはやめてくれ。

そうしているのは、もちろん長男・傑である。

顔色ひとつ変えないで。

突然始まった狂乱に、学は笑いながらアタシのもとにやって来た。

「椿ちゃん、おめでとう。プレゼントあげる」

そう言つて、主役のアタシをベランダに締め出す、三男・学。

何すんのよ！ と憤るアタシをシカトして、彼は傑兄ちゃんに声をかけた。

「傑兄ちゃん飲み過ぎだよ。ちょっと頭冷やして来たら？」

学はそんなことを言つて、大胆にも傑兄ちゃんまでベランダに追いやつた。

「こら、学」なんて口だけ怒る傑兄ちゃんを横目に見ながら、アタシの心臓は体から飛び出しそうなくらいバクバクしていた。

完全無視を決め込む学に諦めたのか、傑兄ちゃんは夜空を見上げる。

「綺麗だな」と呟いて、それから彼は少し笑つた。

「やつぱり少し酔つたかな。椿がずいぶん綺麗に見える」

「泥酔だね」なんて言い返したけれど、本当の本当は、叫び出したくらいドキツとした。

部屋の中の喧騒とは遮断されたこの世界で、アタシはひとりで浮かれていた。

「そんなに綺麗？」

改めて尋ねると、傑兄ちゃんは誇らしそうに微笑んだ。

「ああ、綺麗だ。俺と牡丹の結婚式の受付嬢に、指名したいくらいだな」

そう言って笑う傑兄ちゃんに、アタシも笑って空を見上げた。

そうしなきゃ、あまりにも大きな絶望に、全てが流れ出してしまいそうだったから。

上げたり下げたり、なんなんだ。

アタシは身勝手にもそう思う。

そんな言葉で締めくくるなら、綺麗なんて、言ってくれないほうがまだ良かった。

「…傑兄ちゃん、寒いから中入ったら？」

アタシが言うと、傑兄ちゃんはアタシを連れて行こうとした。

もうちょっと空を見ていたい、なんて言い訳するアタシを見て、傑兄ちゃんは逡巡したあげくここにとどまることを選択した。

ひとりにして欲しかったのに。

そんなふうに思いながらも、どこかで喜んでいる自分を自覚していた。

たったひとりで泣かせて欲しい。

1秒でも長く、アタシの隣にいて欲しい。

矛盾したふたつの願いがアタシの内に渦巻いて、アタシはどうすることも出来ずに立ち尽くす。

もしも牡丹姉ちゃんがいなければ、もしもアタシに勇気があったなら、今この場所で、彼に想いを伝えただろうに。

ふと、傑兄ちゃんが腕時計に目を落とした。

「もう１１時か」と、呟いて、彼はアタシに向かってにっこり笑った。

「これでもう、１７歳だな。誕生日おめでとう、椿」

ありがとうを言いながら、１６歳が１７歳になっただくらいじゃ、何も変わらないことを思い知る。

アタシはこんなにちっぽけで、いだいた想いは大きくて、アタシの腕には余るくらい。

好きだよってその一言が結局言えず仕舞いになったのは、アタシ、東谷 椿１７歳の、冬のお話。疑問をそのまま口にする。すると彼は、当然のように言い切った。

「君がとても魅力的だから」

ひえーっ、である。そんなことを臆面もなく言える彼は何者か。審美眼は大丈夫なのかと、アタシは本格的に心配した。しかしアタシの思惑露知らず、彼は耳まで染めて呟いた。

「お友達になってくれませんか？」

「え？ 友達？」

聞き返すアタシである。どうやらからかっているわけではなさそうだと感じたのは、彼の顔が相当せっぱつまっていたから。

なあんだ、と、アタシは知らず笑っていた。

「そんなんだったら全然オツケー。だったら今からアタシらツレだね」

「…ツレ？」

聞き返した彼に、ああ通じないのかと思い至る。

「友達ってこと」

言い直すと、彼は、「本当ですか？」と、目を輝かせた。

そう尋ねられて、アタシは不思議な気分になった。たかが友達になるのに、ちよいと大袈裟すぎやしないか？

「ほんと、ほんと。そっぴゃさ、名前何ていうの？」

「竹内 行弘と申します」

ユキヒロは丁寧にな乗って一礼した。

「ユキヒロね。分かった。アタシのことは椿でいいよ」

アタシが言つと、彼は嬉しそうに笑った。「では、部活があるのでなんて言つて駆けて行く。」

ずいぶんお上品だな、野球部エース。

アタシはそんなことを考えて、ちよつと笑った。

そんなことが起こった数日後、アタシはクラスメートとおしゃべりしていた。例によって恋バナである。

クラスメートが大切そうに出したネックレスを、見せてもらった時のことだ。

「誰に貰ったのー？」なんて、分かってるくせに聞くのは、女の子の礼儀。

予想通りその子は顔を赤らめて、

「わたくしのいい人に」

と呟いた。

「いい人って、カレシのことでしょ？ いいなあ」

アタシが言うと、その子にはっこり微笑んだ。

「ええ、わたくしのツレですの」

「…はっ？」

ぽかんとするアタシに、クラスメートは不思議そうな顔をした。

「東谷様、いかがいたしました？ 交際相手のこと、ツレとおっしゃるのでしょうか？」

待て待て待て！

「誰に聞いたの?！」

「野球部の方々、みなさんそうおっしゃってよ」

まあ、わたくし、何か間違っておりますかしら、なんて、その子はクラスメートを仰ぎ見た。見られた側も首を傾げる。そして、極めつけはこの一言。

「だって東谷様、野球部の竹内様にそうおっしゃったのでございましょう?」

確かに言ったよ、言いましたとも。でも待って、と、アタシは混乱したまま制止する。

「友達になってくれて言われたんだよ? それってイコール付き合ってたって意味になっちゃうの?」

アタシのあまりのパニックっぷりに、みんなは神妙な顔をして頷いた。

「ついに東谷様のおめがねに適う殿方のお出ましですわねって、みなさん噂していっぱいいますのよ」

ああ、この今の気持ちを表すのに、と、アタシはがっくりとうなだれる。良家の子供に通じる言葉はないものか。

それからアタシは、いろんな人に尋ねて回った。

野球部エース、竹内 行弘について。

なんてったって、どのクラスかも分からないのだ。

知っているのは名前と部活、ただそれだけ。

そんなことでカレシとカノジヨと言えるのか？！

幸い、野球部エースとだけあって、彼は有名人のようだった。クラスのみんなは、アタシにそのつもりがないと分かると何だか残念がりながらも教えてくれた。

「教室までは存じませんが、2年生でいらっしやいますわ」

なんとまあ、彼は先輩だったんですか。そう目を丸くするアタシに、クラスメートは呆れていた。

野球部エースはよほど名が通っているようだ。

「先輩に断る時ってさ、何て言ったらいいのかな？」

その質問に、答えは返ってこなかった。

「その場でお断りになりませんと……」だそうだ。なんてこったい。

ああ、東谷 椿、一生の不覚！

とりあえず学に相談しようと、アタシは放課後になるのを待ち続けた。

帰りのホームルームが終わってから、学のクラスに直行する。しかし彼はいなかった。

こんな時にどこ行ったんだ、と理不尽にも憤慨するアタシに、学のクラスメートが、部活に行ったのではないかと教えてくれた。

仕方なく、美術部部室に走って行った。入口である『地獄の門』の

前で、アタシは思わず立ち止まる。門には紙が貼り付けられていた。

『美術部に所属されている皆さんへ。』

諸事情により、本日お休みさせて頂き下さい。

部室にご用のある方は、職員室にて鍵をお借りして下さい。

美術部顧問 新堂 尚樹

紙にはそう書かれていた。

へえ、新堂先生の名前って尚樹っていうのか、なんて、感心している場合ではない。だったら学はどこにいらんだと、アタシは悔し紛れに部室の扉をガタガタ揺らした。

するとカチツと音がして、扉はアタシを招き入れた。

誰かいるのかと、アタシは時計だらけの廊下を進んだ。もし学がいなくても、誰かいるなら聞けばいいのだ。

生徒の作品が置いてある部屋から声が聞こえて立ち止まる。休みの日にまで作品に取り組む生徒の邪魔をしないようにと、アタシは極力音を立てないようにドアを開けた。中を覗く。いるのは学ひとりだった。

目当てのものが見つかったのに、アタシには声をかけることが出来なかった。

学はただ、立っていた。ただ立って、彼は教室の前方を見つめていた。

「好きです」

と、声が聞こえて、その主が学なのだと気付く。

「先生のこと、大好きです」

最後は涙声になりながら、それでも学はしゃがみ込むこともしないで、ただその言葉を繰り返していた。

好きですと、たった4文字の愛の言葉を。

アタシはというと、学の気持ちの深さを、改めて思い知っていた。自分の心に気が付かないふりをして、ごまかしながら生きるしかないアタシたちの恋心は、聞く人もない場所では吐露できない。

「新堂先生…っ」

学はきつと泣いているんだと、アタシはぼんやり考えていた。大切な人が出来たらちゃんと伝えるように、とアタシに諭した美術部顧問は、自分に恋する男の子に、そうする隙を与えない。

悲しいとか、やり切れないとか、そんな言葉で学に同情することは出来なかった。アタシに出来ることといったら、学の告白を聞きながら、嗚咽を漏らさないように喉に力を入れること。

ただそれだけ。

アタシはなんて役立たずなんだと、学を見つめながら途方に暮れた。飛んで行って抱きしめることも、新堂先生に罵声を浴びせることも、アタシには出来ない。

そんなに辛いならやめちまえ。そう学を説得することも出来ないのだ。

学は立ちんぼうのまま、新堂先生の名前を呼び続けていた。大好きですと、自分の気持ちを添えながら。

アタシはまた、物音を立てないように気を配りながら、美術部部室をあとにした。通路に所狭しと並べられたアナログ時計の出す音が、学のかき消してくれることを、ただ、願う。

直接言うことなんて出来ないから、今この時だけでも、学に堂々と言わせてあげて。

新堂先生にいただいた想いは、世界で1番ピュアだから。

結局頼みの綱である学の助言を得られずに、アタシは野球部の使うグラウンドに歩いて行った。ベンチに座って、野球部は談笑している。

休憩中だ、と、アタシは何だか気まづくなった。だけどその時のアタシは必死すぎて、全員の見える前で竹内 行弘に向かって、頭を下げて謝った。

「ごめんなさい！ アタシ、友達ってマジ普通の友達のことだと思ってました！ 付き合うとか、そういうのじゃないと思ってて、だから」

いざとなると、言葉って浮かんでこないもんだなって、ちらっと思う。

わめき散らすアタシを、野球部全員が不思議そうに見上げていた。

「えっと…、東谷さん、どうしたんですか？」

困惑顔でそう尋ねる竹内 行弘である。

どーしたもこーしたもねーやい！

アタシはすっかりパニックに陥って、ただひたすらに頭を下げた。

「ごめんなさい！ アタシ、好きな人いるんです！ 付き合えないです！ すいません！」

それだけ叫んで、アタシは引き止める行弘の声を振り払うように走り出した。

自分のしたことに後悔したのは、校門を飛び出してしばらく走った後だった。

うおーっ、言っちゃったー！

好きな人がいるなんて、あんな公衆の面前で叫ぶだなんて。

ああ、と、アタシはうなだれる。

東谷 椿、16歳。一生の不覚が、一生の恥になりました。「しないのではなく、出来ないんです。東谷 椿さん、私の部屋に飾ってあったゴーギャンの言葉、覚えていますか？」

『我々はどこから来たのか。我々は何者か。我々はどこへ行くのか』
覚えていまずと答えたアタシに、新堂先生はほんの少し俯いた。口元には、笑みをたたえたまま。

「あれは、私の心そのものなんです。彼女に対する想いがどこから来て、あんなにも私を蝕んだあの気持ちは何者で、叶えられなかった恋はどこへ行ったらいいのか模索している。答えはどこにもありません。どんなに時計の針が進んでも、抜け出すことは出来ないでしょう」

そんなことを言う新堂先生は、どこか遠くを眺めていた。そして、
「東谷 椿さん」とアタシを呼ぶ。

「大切な人が出来たら、想いを伝えないといけませんよ」

それは出来ない。そう思った。
だけど、口に出すのは憚られた。「はい」と殊勝に頷くアタシに、
新堂先生はにつこりと笑う。

「みんなが噂していますよ。西園寺くんのいとこの東谷 椿さんは魅力的だと」
えっ、とアタシは声を上げる。

「アタシ、そんなにモテてます？」

アタシが尋ねると、新堂先生は頷いた。

「ええ、大人気ですよ。女生徒に」

女生徒かよっ！

思わずズッコケたアタシに、新堂先生は声を上げて笑った。

「そのうち男子生徒の耳にも入りますよ。恋人が出来たら教えて下さい。職員室で賭けをしているので」

「賭け？」

聞き返したアタシに、新堂先生は悪びれもせずに応えた。

「ええ。賭けです。学校一人気の西園寺くんが親分と慕う東谷 椿さんを射止めるのはどの生徒か、教員同士で賭けをしているんですよ。やはり、各部活のキャプテンが有力ですね」

教師がそんなこととしていいのか？！

目は口ほどにものを言う。言わなかったけれど、新堂先生はいたずらっぽく微笑んだ。

「内緒ですよ」

なんて、秘密の多い部顧問だ。

その翌日から、まるで謀ったかのようにアタシのもとには来訪者が

増えた。一体全体どういうわけ？と首を傾げるアタシに、クラスメイトはただ、笑う。

「わたくしの兄、図書委員をしておりますの。東谷様は、どんな物語がお好みですか？」

とか、

「双子の弟がサッカー部に所属しておりますの。よろしければ、東谷様も見学あそばして？」

とか、

「わたくしの幼なじみですけど、東谷様のお話ばかり聞かされますのよ。彼、オペラに興味がありなの。東谷様、一緒にコンサートなどいかが？」

とか。

つまるところ、アタシに興味を持つ男に近い女の子がやって来るのだ。

えーい、情けない！

と、アタシはすっかりホームグラウンドと化したクラスの中で憤る。

アタシに用があんのなら、直接アタシのツラ見てもの言え！

そんなアタシに、「東谷様のそんなところが」と、クラスのみんなは笑う。

「みなさん、憧れる理由のようでしてよ」

「どこが?! アタシなんてガサツだし、ズケズケもの言うし、口悪いし、女の子らしいとこなんてひとつもないじゃん!

アタシが男だったら、絶対みんなを嫁にしてるよ!」

そう言うと、クラスメートたちは眉根を寄せてたしなめた。

「他の場所では、おっしゃらないほうがよろしいわ。東谷様とお近づきになりたいのは、むしろ女性の方々ですもの」

じゃあ何か? 男にかこつけて、アタシはじつは女の子たちにモテているのか?

その話を学にすると、彼は腹を抱えてゲラゲラ笑った。

「なんであんたはそう笑うのよ!」

「だってだって、椿ちゃん、確かに女の子って感じじゃないんだもん。女親分って感じだもん」

もしくはボスとかアニキとか、なんて言う学の後ろ頭をはたいてやったのは、西園寺家でのことだ。

一緒に聞いていた護兄ちゃんや桜姉ちゃんも笑っている。

「確かにお前は、女の子って感じじゃねえよなあ」

と、次男・護。

それを聞いて、桜姉ちゃんはニコニコした。

「いいじゃないの、椿。私安心したわ。好きな人が出来たら、1番に教えてちょうだいね」

もういるんだよ、という言葉は飲み込む。

あんたの姉貴のカレシだよ。

あんたの旦那の兄貴だよ。

言えないなあ、アタシはこっそり溜息をついた。

ふらふらと部屋に戻る。ふて腐れたみたいにベッドにごろんと横になって、アタシはひとり考えていた。

みんなに好かれるのは、すっごくすっごく、嬉しいことだ。けどさ、と、アタシは溜息と共に考える。

本当に好きな人に好かれなきゃ、そんなの全部、ないのと同じ。

そう思い付いて、アタシは少し、うろたえた。

ああ、アタシもおんなじだったんだって、思い出しちゃったから。

傑兄ちゃんの好きな人は何を隠そう東谷 牡丹で、東谷 椿では、ない。

西園寺 傑にとって重要なのは牡丹姉ちゃんとの未来であって、アタシの彼に対する想いは、ないのと同じ。

そこでアタシは、自分の頭をポカポカやった。

ええい、暗いぞ、東谷 椿！いつものパワーはどこ行ったんだ！

そんなふうにより自身を奮い立たせたその日の夜、アタシ、東谷 椿 16歳は、自分の非力さを思い知る。

「椿、学校で人気あるんだってな」
仕事から帰って来た傑兄ちゃんが、アタシにそんなことを言ってきた。

思わずアタシは学をにらむ。
すると彼は、「ぼく知らないよ」とかぶりを振った。

「桜から聞いたんだ。大喜びだったぞ」

傑兄ちゃんの弁解に、アタシは桜姉ちゃんに目を向けた。…傑兄ちゃんがほいたネクタイを、牡丹姉ちゃんが受け取る場面を見ないように。

「だって、嬉しいじゃない」

次女・桜は取り繕う。

「椿には、幸せになってほしいもの」

その一言に、護兄ちゃんがどう思うのか分かってるのか？

そう思ったけれども、黙っておいた。

桜姉ちゃんは嬉しそうで、そんな彼女を見つめる次男は幸せそうだったから。

「どんな人に好かれているの？」

そう尋ねたのは長女・牡丹だ。

知らないよ、とアタシは返す。

「男の子は、直接アタシのそこには来ないもん。頼まれた女の子が来るんだもん」

わあカワイイ、と呟いたのは、次女・桜だった。

「男の子たちは照れてるのね。カワイイ」

そんなことを言う桜姉ちゃんの頭を、護兄ちゃんがパシンと叩いた。

「痛あ。もう、護くん何するのお」

「俺の前で他の男なんか褒めんじゃねーよ」

そう言ってそっぽを向く次男・護である。そんな弟を目の当たりにして、傑兄ちゃんは笑い出した。

「狭量な奴だな。お前そんなに自信がないのか」

「…兄貴みてーな兄貴持つて、どう自信持つて言うんだよ」

それを聞いて、傑兄ちゃんは「ちよつと待て」と牽制した。

「俺が完璧なのは仕方ないとしてだな、もつと余裕を持ったらどうなんだ」

護兄ちゃんはその言葉にむっとしたのか、桜姉ちゃんの腕を掴んで立ち上がった。

「うつせーよ、馬鹿兄貴！桜、部屋行くぞ！」

そして桜姉ちゃんをぐいぐい引つ張る。

傑兄ちゃんは笑いながら、「おい、護！」と声をかけた。

「壁が厚いからって、あんまり無理させるなよ？」

うつせーんだよ！と言う護兄ちゃんの怒声に、傑兄ちゃんはまたひとしきり笑うのだった。

「傑兄ちゃん、言い過ぎ。護兄ちゃんがかわいそう」兄二人のやり取りを見ていた学がそう呟いた。

「護兄ちゃん、じつは繊細なんだから」

それはないだろと思うアタシの横で、傑兄ちゃんはひとつ唸って腕を組んだ。

「そうだな。どうもあいっは、一途と言うか、女に対してぐずぐずしてると言うか」

「大事にしてんでしょ。ぼくは護兄ちゃんのああいうとこ、好き

「だけど」

呆れる長男に、溜息をつく三男である。

「学、お前はあそこまでにはなるなよ」なんて、傑兄ちゃんは釘をさした。

「…なっちゃうかも」

学はそう言って、傑兄ちゃんを慌てさせた。「俺の心配事をこれ以上増やすな」とのことだ。

心配事と言えば、と、それまで聞き役に回っていた牡丹姉ちゃんが、アタシに顔を向けて口を開いた。

「椿、お願いだから変な男の子には引つかからないでね。ちゃんとした子でなきゃ、お姉ちゃん認めませんよ」

「母親か、お前は」

そう突っ込んだ傑兄ちゃんに、牡丹姉ちゃんは抗議する。

「だってだって、椿はまだ小さいんですもの。私、心配で心配で」そんなことを言って瞳を潤ませる長女・牡丹に、傑兄ちゃんは大いに笑った。

「分かった分かった。よし、椿。好きな男が出来たら連れて来い。俺が直々に品評して、ダメだと言ったらすぐに別れる」

連れて来い、なんて。アタシは思わず下を向いた。

鏡でも持って来ればいいのか。

そんなアタシを見やって、慌てているのは学だった。「はいはい」なんて言って、アタシは席を立つ。そのまま部屋に向かったら、背後から学の怒声が聞こえた。

「傑兄ちゃんの、馬鹿っ！！」

きつと傑兄ちゃんは、意味が分からず立ち尽くしているんだろうな。そう思うと、アタシは滑稽なほどの悲しみに、酔うことも出来なかった。

部屋のドアが叩かれて、学だろうなと考えた。けれども予想に反して部屋に入って来たのは、ばつの悪そうな傑兄ちゃんだった。

「椿」

呼ばれてアタシは顔を上げる。けれどもすぐに俯いた。今、自分がどんな顔をしているのか分かっていたから。

「悪かった」と、傑兄ちゃんはそう言った。

「お前の気持ちも考えずに」

傑兄ちゃんを見る。知ってたの？ アタシの気持ちに気付いてたの？ そうだ、この人、刑事なんだ。

そう思うと血の気が引いた。審判を待つ罪人の気分で、アタシはただ、傑兄ちゃんの言葉を待っていた。

「これから俺の妹になるんだと思うと、つい……。変なこと言って悪

かった。口出しなんかしないから、恋人が出来たら会わせてくれるか？」

アタシは返事が出来なかった。気付かれてなかったんだという安心感と、相手にもされない空虚な気持ち、手に手をとってアタシを襲った。

ごまかさなくちゃ、何とかしなきゃ。

アタシは自分を励ましてみる。

口の両端に力を入れて、笑って何かを言わなくちゃ。

「…当ったり、前じゃん」

顔を上げて、傑兄ちゃんを見なくっちゃ。

「絶対、超いい男、連れて来るんだから」

さあ、笑うなら、今。

「だから…」

あと一言。心配しないでって、それだけ言わせて。お願いだから、ねえアタシ、泣いたりなんてしないでよ。

「だから…」

「椿？ どうした」

向き合う傑兄ちゃんにそう聞かれて、アタシは自分がもう泣いているのに気が付いた。

傑兄ちゃんは、ちょっと困ったように微笑んで、アタシの頭をよしよしした。

もうダメだった。涙腺はアタシを待つてはくれなかった。その事実を思い知って、アタシは、傑兄ちゃんに泣きついた。大声を出して、小さな子供のように泣く。

傑兄ちゃんは、アタシをギュッと抱きしめて、背中をトントン叩いてくれた。

「悪かった、椿。ごめんな」

謝ってなんか欲しくない。そう思った。もしも悪いと思うなら、アタシの気持ちに気付かないことに対して謝ってよ。

そんなことを恨みがましく考えてしまう自分が情けなかった。何でこのタイミングで泣くのよ、と、アタシは自分に罵声を浴びせる。子供みたいに泣きついて、いい加減にしてくれない？ 傑兄ちゃんはアタシのことなんか、これっぽっちも愛してないんだから。揃ってそんなことを言うこの恋人たちに、アタシと学は、ただ頷くことしかできなかった。

ありがとう、なんてふたりに言われて、アタシたちはなんだか変な気持ちになった。どうしてそこまで気を使うのか。愛し愛されているくせに。好きだと言える関係のくせに。

傑兄ちゃんは困惑している。それでもアタシは泣き続けた。

そんな自分に嫌悪を覚えるかたわらで、泣いていれば傑兄ちゃんはアタシを抱きしめててくれるなんて、卑怯な打算があったから。

ようやく涙も枯れた頃、傑兄ちゃんはアタシの目元を長い親指で拭
ってくれた。鼻をすするアタシに笑いかけて、彼は言う。

「お前が学校で、上手くやってるみたいで安心した」

目で問いかけるアタシに、傑兄ちゃんは自信満々に口角を上げる。

「俺の言った通りだったろ？そのままでもいいんだって」

頷くと、アタシの目から残っていた涙がポロンと落ちた。それを見
て、傑兄ちゃんは「また泣くのか」と少し笑う。そして、そのまま
地べたにどかと座った。

「ほら、来い椿。泣き止むまでギューしてやるよ」

そう言って、傑兄ちゃんは両手を広げた。アタシは膝を折って彼に
抱き着く。

もう涙は出て来なかった。今こそ泣けたらいいのにと、不謹慎にも
そんなことを考えていた。

好きだよ、と、傑兄ちゃんの腕の中でアタシは思う。

傑兄ちゃんの背中に腕を回して、「俺の妹は泣き虫だな」なんて言
葉には耳を塞いで、今だけは、西園寺 傑を独占したい。

それが精一杯アタシを慰めようとしている傑兄ちゃんに対しての裏
切り行為だと、分かっていた。

分かっただけで止められなかった。

きつと生涯最高となる幸福のただ中で、アタシ、東谷 椿 16 歳は、新堂先生の言葉を思い出していた。

傑兄ちゃんに対するこの想い。

これは一体どこから来て、これは一体何物で、そしてどこへ行った
らいいのだろうか。

答えは出ないと先生は言った。
アタシだって、別に答えを知りたいわけじゃない。

ただ、その問題を抱えたままでも構わないから、今この時の幸福が、
永久に続けばいいと願うだけ。

東谷 椿の長い一日

とんとん拍子とはこのことだ。

アタシ、三女椿は祝福の嵐の中、そんなことを考えていた。台風の目たる長女を眺めて、にじんだ視界でぼんやり思う。

牡丹姉ちゃんは、ウェディングドレスがよく似合う。

今日、いきなり言われたわけじゃない。ずっと前から分かっていたことだ。準備もずいぶん手伝った。入籍は、ひと月前に済ませている。それなのに、アタシの目元は乾かない。

傑兄ちゃんと牡丹姉ちゃんの鳴らすウェディングベルを、叩き壊す勇気もないくせに。

結婚という二文字が、アタシの気持ちを曇らせた。皮肉にも、空模様は素晴らしい。

入籍イコール結婚なのか、挙式イコール結婚なのか、アタシにはよく分からない。

たったひとつ分かっているのは、この期に及んで傑兄ちゃんが大好きだっていう事実だけ。

白い婚礼衣装の傑兄ちゃんは、アタシのことをペンペン草と笑った意地悪な奴とは、似ても似つかない。

神様に誓う愛の言葉も、柔らかく落とす誓いのキスも、何もかもが、優しい微笑みに彩られていた。

今日は朝から大変だったなあと、アタシは現実逃避ぎみに考える。

太陽昇ってるんですかってくらいの早朝から叩き起こされて、桜姉ちゃんとお揃いで買ったドレスなんて着ちゃってさ。嫌味を込めて柄タイツでも履いてやろうかと思ったけれど、結局やめた。

それは傑兄ちゃんと手を取り合って笑う牡丹姉ちゃんが、いつもよりずっと可愛く見えたから。

敵わないと、痛切に感じた。
ライバルですらないくせに。

家族写真でアタシは笑えていたのか、本当言うと自信がない。
親類縁者や友人たちにごまんとカメラを向けられて、傑兄ちゃんは牡丹姉ちゃんを引き寄せて、レンズに笑顔を向けていた。

1度だけアタシも引っ張りこまれてピースする。その時牡丹姉ちゃん是他の友達と撮影していた。

きつとこれが、人生最初で最後の、傑兄ちゃんとのツーショット。

その時だけは、笑顔だったと確信している。

まるで幸福の絶頂みたいな顔をして、花嫁さんのふりをして。

虚しかったけど、嬉しかった。

傑兄ちゃんの後輩って人が寄って来て、「カレシいますか？」なんて尋ねられた。

周りの友達も悪ノリして、「彼どうですか」なんてお勧めしてくる。

「お前なんかにやれるか、俺の妹だぞ」

傑兄ちゃんはそう言って、意地悪そうに微笑んだ。アタシは笑顔で言い返す。

「優しそうな方でいらっしゃいますのね。まあ、何のお話でしたかしら。よく考えてみますわ」

そう小首を傾げるアタシに、傑兄ちゃんはゲラゲラ笑った。「椿も言うようになったな」なんて、当たり前じゃないか。

「伊達にお嬢様に囲まれてないんだよ」

こんなところで役に立つなんて、まったく茶番もいいとこだ。

披露宴で、もう一度ふたりは愛を誓った。この日のために帰国した母の隣で、次女はひたすら泣いている。それが何だかおかしくて、アタシは桜姉ちゃんをからかった。

「何言ってるの。椿だって泣いてるじゃない」

「それは…」と、アタシは言葉に窮す。牡丹姉ちゃんの声が聞こえる。

「大好きな傑さんと結婚できて、幸せです」

それを耳に入れながら、アタシは、

「牡丹姉ちゃんが、あんまり綺麗なんだもん」と言い訳した。

「本当に、世界で1番幸せです」

その声は潤いを持っていて、壇上の牡丹姉ちゃんも、泣いているのだと気がついた。

涙の種類は、正反対にも関わらず。

二次会に出て欲しいという牡丹姉ちゃんの誘いを断って、アタシは西園寺家に帰ることにした。

アタシの隣には、当たり前みたいに学がいる。

「椿」

ドレス姿のままで、牡丹姉ちゃんは踵を返すアタシに声をかけた。

「私、今、幸せよ。椿にも幸せが来ますように」

ありがとうとお礼を言って、気持ちが溢れ出る前に顔を背けた。

こんなにも『幸せ』な、終末。

予想が出来ていただけに、アタシの涙は止まらなかった。

17年間生きてきて、1番長い1日だった。

学は何も言わないで、アタシのそばにいてくれる。

護兄ちゃんと桜姉ちゃんも、これで兄妹になっちゃったんだな。

そう思うと愛し愛されるふたりがなんだか可哀相ではあったけど、この悲しみの中で他人を思いやる余裕なんか、これっぽっちも残ってなかった。

「椿ちゃん」

泣いているアタシを学が呼んだ。アタシはそれに答えずに、「ねえ学」と声をかける。

「アタシ、ほんとに好きだったんだよ」

うん、と学は相槌を打つ。

「ほんとに、世界で1番、好きだったんだよ」

それは今でも変わらなくて、きっとこれからも変わらない、17歳のアタシの真実。

声に出せたらどんなにいいか。

人目もはばからずに叫ぶことが出来たらどんなにいいか。

今日の二人を目の当たりにしても、想いを曲げるなんてことは出来ない。

傑兄ちゃん、大好きです。

東谷 椿は、西園寺傑が大好きです。

そんな言葉は虚空に消えて、意味を持たない。

それが分かっているから悲しかった。

そばにいたいと望むのは、この上ない罪だと知っていたから。

いつか見た夢

それから、西園寺さんちの若夫婦は、ふたりで新婚旅行へと旅立った。

母はたった一言、

「牡丹より先に死んだら許さない」

なんて傑兄ちゃんを脅していた。

母は父を愛しているのだなあとと思うと、アタシは柄にもなく感動してしまった。

次男・護と次女・桜は、今頃沖縄でふたり仲良く暮らしている。長男と長女の結婚式が済んだ夜、護兄ちゃんが傑兄ちゃんに言ったのだ。

例の、桜姉ちゃんを内縁の妻にするっていう話。

傑兄ちゃんはただびっくりしていて、牡丹姉ちゃんは泣き出した。

「私たちのために、ふたりが不幸になるなんて耐えられない」

そう言う牡丹姉ちゃんに、桜姉ちゃんはっこりしていた。

「不幸じゃないわ。護くんがいるから、私、東谷 桜のままで幸せになれる」

そんなふう言い切った桜姉ちゃんが、なんだかすごく、かつこよく見えた。

そんなことがあったから、傑兄ちゃんが提案したのだ。

沖縄でダイビングスクールを開きたい。だからそこで護にはインストラクターをやってほしい。

それで真ん中っ子たちは決意して、苗字はばらばらのまま、沖縄で家庭を持つことになった。

で、アタシと学の末っ子ペアはというと、相変わらず学校に通って、相変わらず道ならぬ恋に悩んでいた。

新堂先生はルノアールの絵に似た彼女を忘れはしないし、傑兄ちゃんは牡丹姉ちゃんを離さない。

それは曲げようのない現実で、その力の前に、アタシたちは平伏すしかないのだった。

「ねえ、椿ちゃん」

学はアタシの名前を呼ぶ。

「きつと、一生に一度の恋だったよね」

そんなことはない、とは、言えなかった。

この1年間、彼に抱いた想いを恋と呼ぶならば、アタシはきっと、もう恋には落ちないだろう。

これほどの激情を味わったのは初めてで、学もそうだったんだなと確信する。

「ぼくも先生のこと、世界で1番好きだった」

学はそう呟いて、アタシの脳裏にはあの日の部室が蘇る。誰もいない空間で、学の告白が静かに響いていた、あの日の放課後が。

「ねえ、椿ちゃん。これでおしまいじゃないなんて、なんか変な感じだよ。これからもずっと、生きてくなんて」

「そうだね」

相槌を打ちながら、アタシも妙な気分になっていた。

漫画や小説みたいに、きりのいいところで「はい、おしまい」ってわけにはいかない。

アタシたちの人生はまだ続く。

下手したら、あと何十年も。

「もしさ、椿ちゃん。もしこれからもずっとずっと、今より好きな人が出来なかったら」

学は言いながら、空を見上げた。そしてアタシの顔を見る。

「ぼくたち、結婚しちゃおうか」

それはまったく、思いがけないプロポーズだった。フリーズするアタシの顔を見て、学は笑う。

「ぼくは椿ちゃんのお婿さんになって、椿ちゃんはぼくのお嫁さんになって、それですと、ぼくは先生を好きでいて、椿ちゃんは傑兄ちゃんを想うんだ」

どう？　なんて尋ねられて、アタシは思わず吹き出した。未来の展望が、見えた気がした。

ずっと好きなままにいる。
ずっと彼を想っている。

その隣には、同じように生きる学がたたずんでいて、アタシたちは互いを見ながら想いを過去に馳せている。

「じゃああんたは、一生アタシの子分なわけね」

そう言っただけで、学は当たり前だと頷いた。

「椿ちゃんは、ぼくの親分だもん。これから、ずっと」

そんなことを言ってくれる学が愛おしかった。それは親愛の情であって、恋愛感情ではなかったけれど。でもそれが、驚くほど心地好

かった。

「人生は長いんだからさ」

学は言つて、アタシを見つめた。

その視線の先に自分はいないということに、なんだかすごく、安心した。

いつか見た夢のように、傑兄ちゃんへの恋心を忘れる時が来るのだろうか。

来ない気がした。

10年たつても100年たつても、彼を好きなままでいられる気がした。

それは錯覚だと分かつてはいたけれど、今のアタシが、正直に感じている気持ち。

これは永遠だと信じたい。

禁断の恋に悩んだ日々も、たくさん泣いたあの夜も、アタシの中に蓄積されて、宝物みたいにしまわれる。

「じゃあ、その時はよろしく」

そう言い返して、アタシと学はハイタッチをした。再会を喜んだあの日みたいに。

人生がこれからも続いていくのと同じように、アタシたちの恋も続く。例えばそれが、叶う日は来ないと分かっている。

これがアタシ、東谷 椿17歳の、1年間の恋のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1349m/>

西園寺さんちの家庭事情

2010年12月31日14時34分発行